

「朝鮮国王国書写」（毛利家文庫第五分冊3他家4）

戦いと友好⑤

朝鮮通信使

室町時代から江戸時代にかけて李氏朝鮮より日本へ派遣された外交使節団を、一般に朝鮮通信使とよんでいます。室町時代には倭寇への禁圧を日本に要請すること等を目的として、15世紀前半に3回来日しています。

【秀吉時代の通信使】

その後150年ほどたち、豊臣秀吉の時代になると、明の征服を企図した秀吉は、対馬の宗氏に対して朝鮮国王を服属させるように命じましたが、朝鮮との貿易を重視する対馬は朝鮮に服属は求めず、日本を統一した秀吉を祝う使節を朝鮮に求めました。

これが天正18年（1590）の通信使で、上の写真はそのときにもたらされた国書の写しとされるものです。

秀吉はこの通信使を服属使節として扱ったようですが、朝鮮王朝には、信使の内紛もあって「秀吉に侵略の意図なし」と伝わったようです。

その後、秀吉は文禄・慶長の役（韓国では「壬辰倭乱」が一般的）をおこしました。

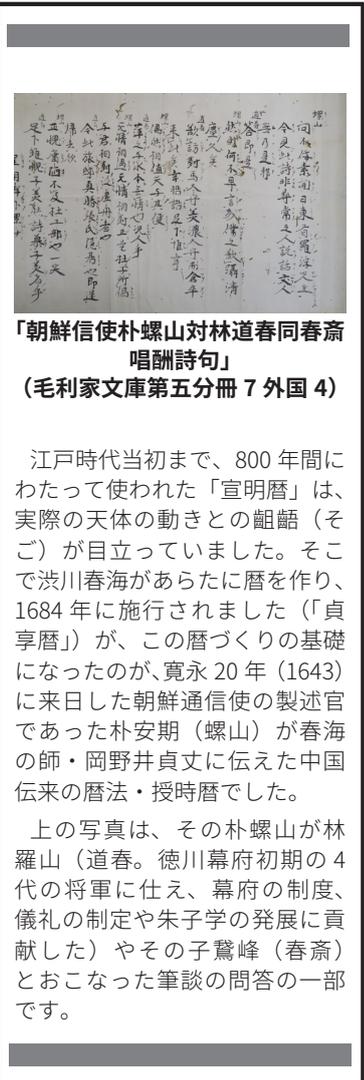
【江戸時代の通信使】

江戸時代には、日本と李氏朝鮮国は正式な国交をむすび、貿易のみならず、「通信（信＝よしみを通じる）」の国として、きわめて友好的な関係にありました。日本の将軍の代替わりや世継ぎ誕生のうちに、通信使は国書を携えて計12回来日し、外交のみならず文化や学問交流の面でも大きな役割を果たしました（右写真参照）。

さて、朝鮮通信使の一行は京城（現ソウル）を出て釜山から出航し、対馬・筑前藍島を経由して、関門海峡から瀬戸内海を大坂近辺まで進みました。その間、萩藩およびその支藩は下関と上関で接待をおこないました。

大坂からは淀川の喫水が浅いため、一行は日本の船に乗り換え、さながら水上パレードのようにして京まで進みましたが、そのときに、幕府船や安芸・備後等の船とならんで、長府藩が大坂に置いていた「川御座船」が使われました。

川船を提供した各大名家は紋章の入った幔幕を張り、きらびやかに船上を飾って華美を競いました。



「朝鮮通信使朴螺山対林道春同春齋唱酬詩句」（毛利家文庫第五分冊7外国4）

江戸時代当初まで、800年間にわたって使われた「宣明暦」は、実際の天体の動きとの齟齬（そご）が目立っていました。そこで渋川春海があらたに暦を作り、1684年に施行されました（「貞享暦」）が、この暦づくりの基礎になったのが、寛永20年（1643）に来日した朝鮮通信使の製述官であった朴安期（螺山）が春海の師・岡野井貞丈に伝えた中国伝来の暦法・授時暦でした。

上の写真は、その朴螺山が林羅山（道春。徳川幕府初期の4代の将軍に仕え、幕府の制度、儀礼の制定や朱子学の発展に貢献した）やその子鷲峰（春齋）とおこなった筆談の問答の一部です。

下の写真は、正徳元年（1711）の来朝の時、「上々官第三船」として提供された長府藩の川御座船の図です。参勤交代の際に海路を利用する西国大名は、大坂に川御座船をもっていました。

この川御座船図は全長約250cmあります。通信使の

淀川上りの際の「朝鮮信使御記録」（下写真）の第8冊には「川船惣長 拾四尋五寸」（1尋=6尺として25.6m）とあり、図が原則どおり1/10のスケールで作られていることがわかります。

通信使一行は、京からは陸路で江戸に向かいました。

「御座船之図」（毛利家文庫58絵図990）



▶当館には、朝鮮通信使に関して

- 「朝鮮信使一件」（毛利家文庫42御勤事62）47点（右写真）
- 「宝暦十三年朝鮮通信使記録」（同御勤事86・87）182点、
- 「朝鮮信使御記録」（県庁伝来旧藩記録877～889）13点
- 「朝鮮人来聘記」（徳山毛利家文庫）17点

などのまとまった記録があるほか、毛利家文庫遠用物にも数多くの関係史料があります。



「朝鮮信使一件」（毛利家文庫42御勤事62）

▶そのうち、県庁伝来の「朝鮮信使御記録」13点は、ユネスコの記憶遺産申請リストに搭載されています。



「朝鮮信使御記録」（県庁伝来旧藩記録877～889）

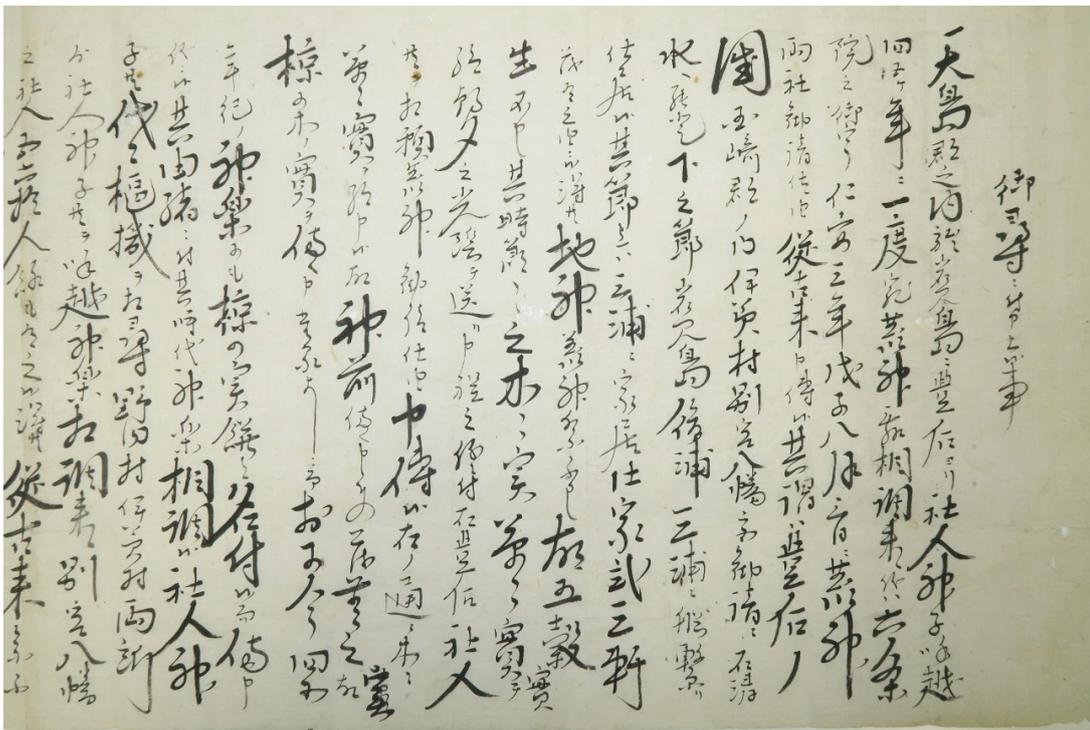
防長と海



その記録と記憶

17

戦いと友好⑥



「御尋二付申上候事（於岩見島豊後より社人神子呼越四五ヶ年に一度宛荒神舞相調来候儀につき）」
（氏本家文書6（9-1））

祝島の神舞 ～海を渡る祭り～

上の写真資料等によれば、仁安3（1168）年8月、豊後伊美郷（大分県国東市国見町）の人々が山城国石清水八幡宮から受けた分霊を奉持して海路で下向中、嵐に会い、祝島（現上関町）の三浦湾に漂着しました。

当時この地には2、3軒しか民家がなく、地神・荒神を祀っていなかったため五穀が実らず、季節の木の实や草の实を食べて暮らしていました。

三浦では、これを縁に教わった荒神を祭り、農耕（麦作）を始めて生活が安定、以後そのお礼にと、島民は毎年伊美別宮社に「種戻し」に参拝し、4、5年毎に伊美別宮社から神職や里楽師を迎え、感謝の祭事を行うようになったと述べています。

この由緒等からは、人々が安定した暮らしを営むことができたようになった感謝と喜びが伝わってきます。

藩の境界を越えて行われる祭りのため、藩府からは不審の目で見られることもあったようで、数度にわたってその由緒を説明し、祭りを存続させました。

なかでも、神主船を中心に權伝馬船等、

大漁旗で飾った奉迎船団が織りなす勇壮な入船・出船の行事が有名で、数日間わたって、新調された小屋掛けの仮神殿で奉納される神楽舞はすべて伊美側の里神楽師によって舞われます。現在は4年に一度、オリンピックの開催される年に行われ、県指定の無形民俗文化財となっています。

当館の「氏本家文書」は、伊美の社人を助け、荒神の祭祀を教わったという「三浦三軒」のひとつである氏本家から寄託されたもので、この祭りの歴史を知るための基本資料のひとつとなっています。

なお、上写真は元禄年間の文書の写しですが、そのほかいくつかの資料でも、伊美社人の漂着は「仁安3年」となっています。仁安3年は、周辺の島嶼部の八幡宮が勧請された年として数多く見られます。当時は平清盛の全盛期でした。



「岩見島地下図」
（地下上申絵図 236）

祝島は、近世には「岩見島」と書かれていました。気候は温暖で、不老長寿の果物という「コッコウ」や、巨大に成長するヨモギ（蓬萊杖）、徐福の伝承などが知られています。

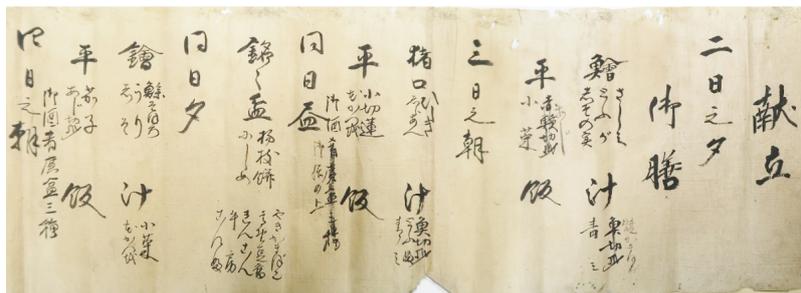


伊美から迎えた神主や神楽団は、まず五穀が伝わったという三浦湾に入り、それから船団を組んで、華やかな海上パレードで集落のある祝島港に向かいます。

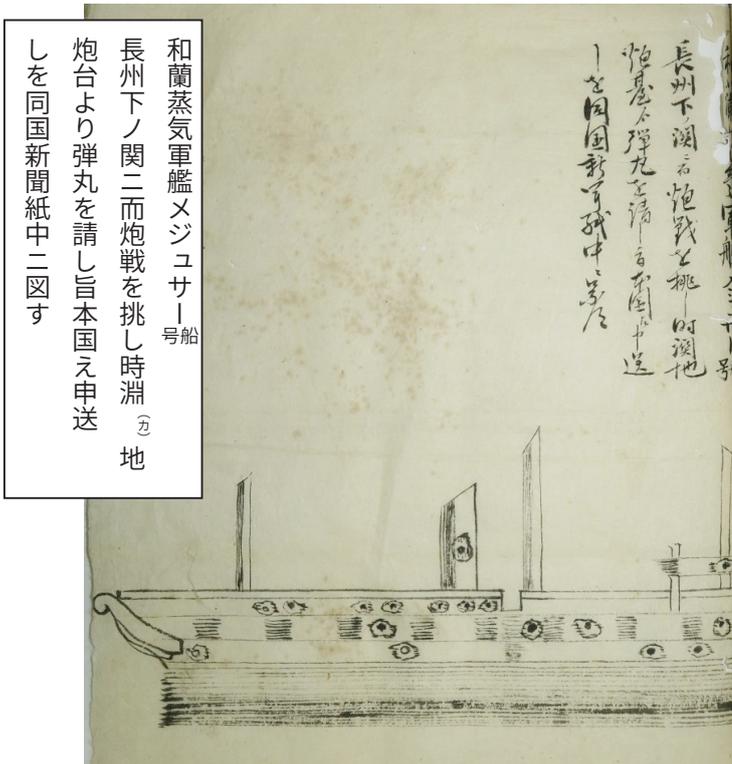
「地下上申絵図」（上）には、この祭りの中心となる荒神が、三浦湾に2基描かれています（白線内）。



「上関祝島神舞の入船絵はがき」（小川五郎収集史料850-2、年未詳）



神舞行事の「献立（明治16年旧8月）」（氏本家文書121）



和蘭蒸気軍艦メジューサー号
 長州下関に砲戦を挑し時淵地
 砲台より弾丸を請し旨本國へ申送しを同国新聞紙中二函す

防長と海



その記録と記憶

18

戦いと友好⑦

「新聞紙」（毛利家文庫29風説16）

攘夷の決行と列国の報復

～居留地新聞に見る文久3年の下関戦争～

【居留地新聞】

通商条約等によって日本の各地が開国すると、横浜（神奈川）・神戸・長崎等の居留地では新聞が発行され、居留者に情報を提供するとともに、日本の情報が母国に送られるようになりました。横浜で発行された“ The Daily Japan Herald”（「ヘラルド」）や、“ The Japan Commercial News”（「日本貿易新聞」等と訳されます）などが有名です。

これらの欧字新聞はさかんに翻訳筆写され、諸大名は情報収集に努めたようです。なかでも“ Commercial News” は広く読まれました。

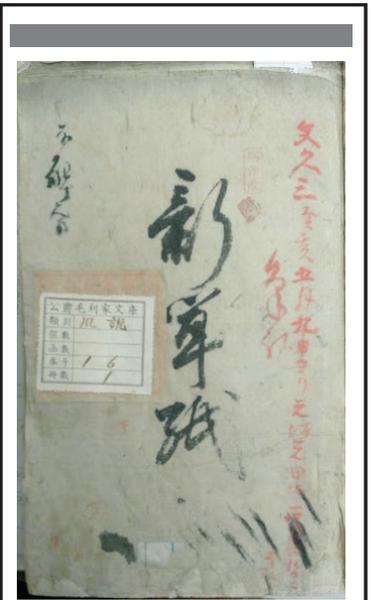
これらの翻訳筆写新聞は、『日本初期新聞全集』（ペリカン社）として集成されていますが、当館では、そこに載らない、いくつかの翻訳筆写新聞の記事を見ることができます。ここでは、文久3年（1863）の攘夷事件に関連して、それらを紹介します。

【攘夷の決行】

孝明天皇の強い意向もあり、将軍徳川家茂は文久3年の5月10日（西暦1863.6.25以下カッコ内は西暦）をもって攘夷を実行することを約束しました。幕府は必ずしも軍事行動を想定していませんでしたが（右解説参照）、長州藩はこの日、馬関海峡を通過した米商船ペンブローック号に対して砲撃を加え、続いて23日（7.8）には仏艦キャンシャン号、26日（7.11）には長年の友好国であったオランダの艦船メデューサ号に対しても砲撃を加えました。

上の写真は、このときに長州藩の癸亥丸から17発の砲弾を受け、かろうじて豊後水道に逃れたメデューサ号の姿ですが、何という新聞の掲載かは不明です。

長州藩によるペンブローック号砲撃のニュースが横浜に届いたのは5月25日（7.10）でした。アメリカはすぐに幕府に抗議し、軍艦ワイオミング号を報復のため下関に差し向けました。



「新聞紙」
 （毛利家文庫 29 風説 16）

幕府は横浜港の鎖港通告をもって攘夷の実行と位置づけており、5月9日に小笠原長行が文書で外国外交団にその旨を告げました。

この資料には、それに対する列国の猛抗議文の翻訳をはじめ、文久3年（1863）の諸事件に関する居留地新聞の翻訳が数多く含まれています。

【米仏の報復攻撃】

米艦ワイオミング号は5月28日（7.13）に横浜を出、30日（7.15）に豊後水道を抜けて姫島に碇泊し、6月1日（7.16）に下関に迫りました。

その日下関には、長州藩がイギリスから買得していた蒸気船（壬戌丸。英名ランスフィールド号）・ブリック船（癸亥丸、英名ランリック号）のほか、萩で建造したバーク船（庚申丸）等がありました。

陸の砲台からの砲撃で戦闘が始まり、米艦ワイオミング号の攻撃で壬戌丸と庚申丸（資料には「ブリク船」（癸亥丸）と書かれていますが、実際には庚申丸）が撃沈され、癸亥丸は大破しました。米艦の被害は即死4名、疵傷者7名のうち1名は傷のため死亡しました（以上は毛利家

文庫29風聞16「新聞紙」によります。同新聞の別訳が、『日本初期新聞全集』第2巻p313にあります。

一方、フランスもキャンシャン号の報復のため、セミラミス号とタンクレード号の2艦が6月1日（7.1）に横浜を出港、同5日（7.20）黎明に下関に迫りました。長州藩の戦艦は先の戦闘で壊滅状態にあったため、仏艦は下関の前田砲台を砲撃して沈黙させ、上陸して砲身を無力化するとともに、民家を焼いて去りました。新聞名はわかりませんが、上記の同資料には、そのときの様子も詳述されています。

米・仏艦隊の報復によって欧米の軍事力を思い知らされた長州藩は、高杉晋作に下関の防衛を任せ、士分以外の農民、町人からも広く募兵することを決め、これにより奇兵隊が結成されることとなります。

「馬関攘夷戦絵図」（毛利家文庫58絵図886）

表紙には、「文久3年6月朔日、5日 馬関攘夷戦 絵図 及ヒ下ノ関砲台図 夷船図」とあります。これはそこに含まれる蒸気軍艦図です。米艦ワイオミング号も仏艦セミラミス・タンクレード両号もスクリュー船であり、描かれている「水車（外輪）」はありませんでした。ただし、5月22日に長州藩が攻撃を加えた仏艦キャンシャン号は、外輪をもつ蒸気艦だったようです。



「仏艦前田砲撃」（毛利家文庫81写真史料87-5）

日付からみて、仏艦セミラミス号による1863年7月20日（文久3年6月5日）の報復攻撃を描いたものです。原画はベルサイユ宮殿にあります。



米艦ワイオミング号が6月1日に下関で報復攻撃を行ったときの様子。「ヒキ島」は彦島。

（毛利家文庫29風説16「新聞紙」）

- 一八 合図礮（砲）台
- 二三四五六七八 礮（砲）
- 八ハ バルク船（庚申丸）
- 九ハ ブリク船（癸亥丸）
- 十ハ 蒸気船（壬戌丸）
- 十一ハ 同茲二撃変
- 十二ハ 日本船
- 十三ハ 亜軍艦（ワイオミング号）
- 十四ハ 同航線
- 十五ハ 海峡

この報復攻撃における米艦ワイオミング号との戦闘の様子は、『山口県史史料編 幕末維新7』p883に掲載されているブリュインの書簡に、また仏艦セミラミス号との交戦の様子は、同書p897のジョレス報告書にも詳述されています。



その記録と記憶

戦いと友好⑧

元治元年8月6日下関戦争の図
 (「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書並絵図面共」(毛利家文庫63馬関戦争22)より)

九州から見た元治元年下関戦争の図

～「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書並絵図面共」～

【元治元年下関戦争】

元治元年（1864）8月4日、英米仏蘭4ヶ国は、小倉藩領田の浦沖に艦船18隻を集結させます。前年（文久3年）下関で外国船襲撃事件を起こした長州藩（解説シート18参照）への武力行使のためです。それは事件への報復に止まらず、海峡封鎖を続ける攘夷勢力・長州藩に打撃を加え、力によって自由な通航を実現し、かつ幕府に横浜鎖港要求を撤回させるためのものでした（保谷徹『幕末日本と対外戦争の危機』）。

5日下関に向かった連合艦隊は、午後から大規模な砲撃を開始し、翌日には陸戦隊を上陸させ前田砲台などを占領し大砲を奪いました。戦闘は8日にはほぼ終結し、長州藩は休戦を申し入れます。連合艦隊は圧倒的な軍事力を長州藩に見せつけ、攘夷の無謀さを知らしめました。

【九州から眺めた下関戦争】

「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書並絵図面共」（毛利家文庫63馬関

戦争22）には、この下関戦争を九州側（小倉方面）から観察し、その様子を描いた絵図10枚が綴られています。8月4～9日の様子を描いたもので、4～7日分各1枚、8日分4枚、9日分2枚です。

絵図には英米仏蘭軍艦の動き、軍艦から下ろされた端舟（カッター）が海岸へ向かう様子、陸戦隊の上陸ルートや戦闘状況、下関や彦島への砲撃とその被害の様子、9日海峡を制圧する4ヶ国の軍艦などが生々しく描かれています。

絵図中には「此山上ヨリ見取之図」などの注記があり、九州側から実際にこの戦争を観察していたことがわかります（白線内）。

【誰がこの図を描いたのか】

絵図が綴られた「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書並絵図面共」には、下関戦争の状況を幕府に報告したさまざまな文書が書き写されていますが、その中に、8月4日～11日に現地を実際に見聞し、それを報告した人物が作成した文書があります。そこには小倉側から見た戦争の状況

◎なぜ「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書並絵図面共」が毛利家文庫に？

この文書は明治42年（1909）、平山成信（1854-1929、官僚、貴族院議員、宮中顧問官）が杉孫七郎に譲渡し、のち杉から毛利家へ寄贈されたものです。

平山の父省齋（1815-90）は幕臣で、慶応年間に外国奉行を務め、將軍慶喜側近として幕政改革や外国との交渉にあたった人物です（吉川弘文館『国史大辞典』）。

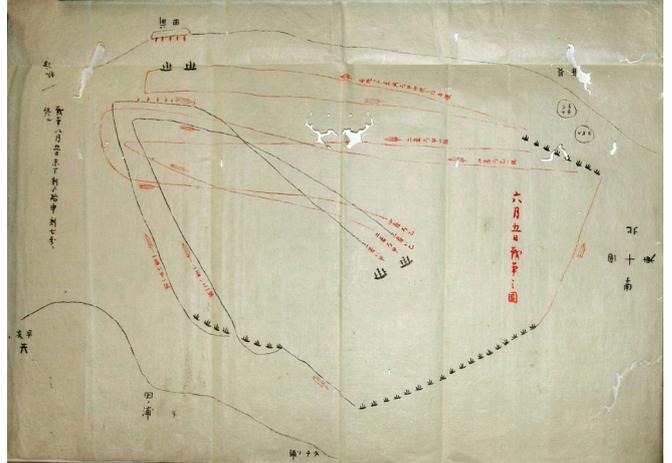
本来幕府に残る文書ですが、省齋が参考資料として手元に置いたまま明治となり、平山家に伝来したのでしょうか。明治末、平山成信が杉に「当家にこんなものが残っていますよ」と伝えたのではないのでしょうか。

や長州側の被害の様子を中心に、小倉藩や福岡藩の動向、さらには上陸した英軍人から直接聞いた話なども載せられています。注目されるのは、戦闘状況や艦隊の動きを説明するなかで、「図面の通り」「図面の如く」とする記載があることです。このことから10枚の絵図はこの報告書に添付されたことがわかります。報告書と絵図の作成者に関

する記載はありません。しかし報告書の内容から判断すると、幕府側から現地に派遣された人物が作成した可能性が高いものです。絵図は下関戦争を実際に観察した人物が、報告書と共にあまり時を置かず描いたものであり、それが連続して複数枚残されている点に大きな史的価値があると言えそうです。



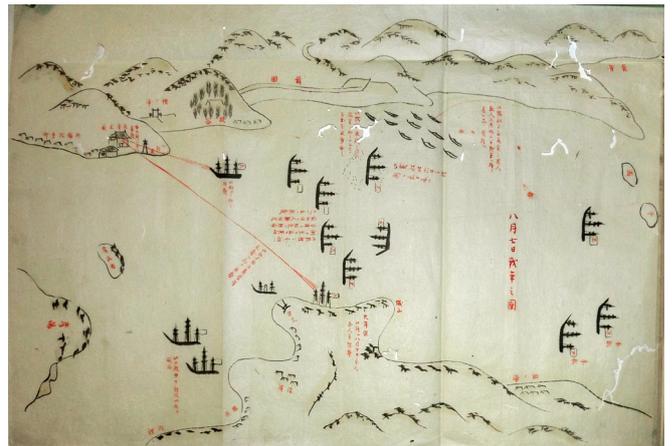
8月4日、小倉藩領田の浦沖に集結した連合艦隊18隻。



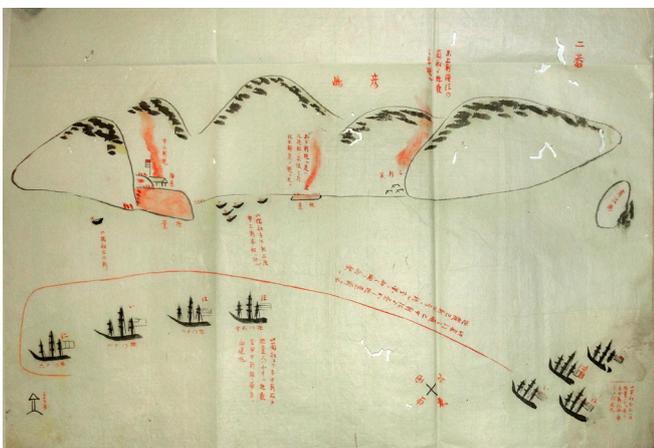
5日、2隊に分かれ前田砲台を砲撃する連合艦隊。艦船の動きが示されている。



6日、長州藩砲台を砲撃する艦隊。上陸を目指す陸戦隊の端船。左下に「此山ヨリ見取之図」との注記あり。



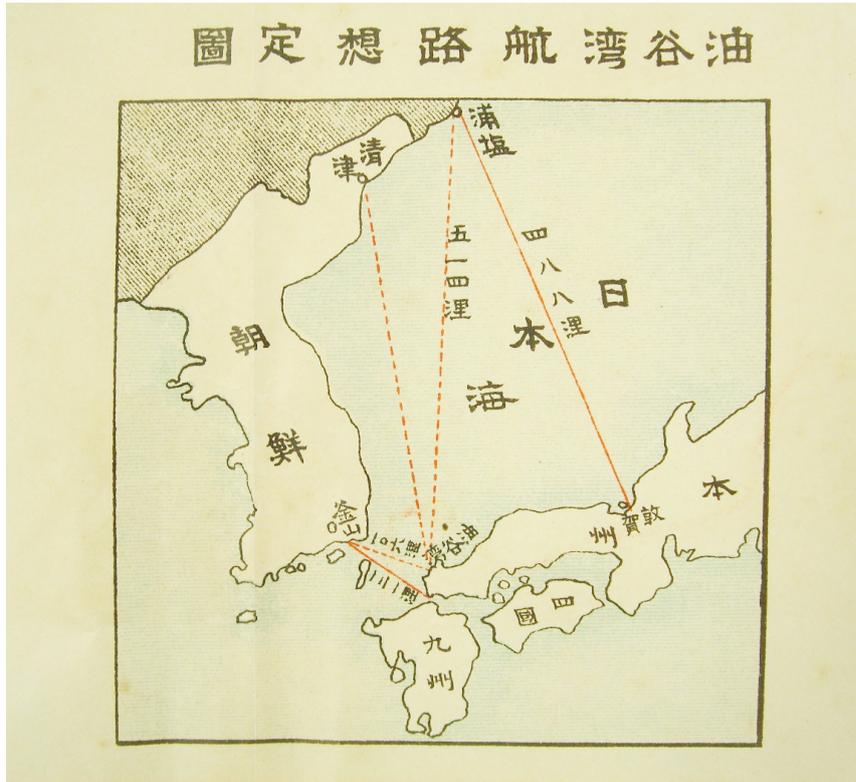
7日、砲撃する艦隊。上陸する陸戦隊。左上には長府藩の米蔵が砲撃されるようすが描かれる。



8日、砲撃される彦島。各艦には国旗も描かれ、どの国の艦船かが示されている。



9日、海峡を占拠する連合艦隊。連合国が戦死者を埋葬したことが左下部分に記されている。



油谷湾から想定された航路（大正15年）。「油谷湾小誌」（行政資料1920市町-38）

防長と海



その記録と記憶

20

戦いと友好⑨

油谷湾 ～池田佐忠と今津萬之助～

【海でつなぐ】

下関からよりも、さらに、満洲に近い。朝鮮半島に近い。ウラジオストックへ、釜山へ。その地理的側面から、油谷湾は交通の要衝としての飛躍を期待されたスポットでした。向津具半島によって日本海の大海原が遮られる閑かな水面。油谷湾は、旧来、天然の良港として認識されていました。玄武岩柱状節理で国の文化財に指定された湾口の依島、向津具半島の懐深くに抱かれたおだやかな波間に浮かび上がる小島を湛えた優雅な眺望。東宮行啓記念写真帖『防長名蹟』にも景勝地として油谷湾は紹介されています（写真1）

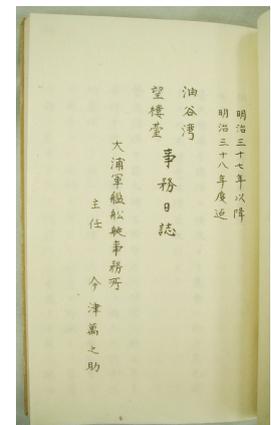
戦前の県下において、油谷湾では、関



写真1 『防長名蹟』（文書館図書291-8）

門地域（彦島・武久）とともに朝鮮半島や大陸への航路の設定が幾度となく検討されました。港湾機能の充実した関門の補助港としての役割を期待されたのです。

戦前期に、油谷湾の総合開発を提唱したのが池田佐忠（1885-1952）です。その中核に位置づけられたのが油谷湾と朝鮮半島の蔚山を連絡する油蔚（ゆじょう）航路でした。大正期に釜山の総合開発を手がけた池田（釜山築港社長）は、蔚山でも築港や都市計画を企図します。そして、日本との密接な経済圏構築の切り札として計画されたのが油蔚航路でした。そのねらいは、関釜連絡の補助ルート確保、釜山の過密状態の解消にもありました。さらに、国策上の「興亜」の時代の雰囲気、油谷湾近辺町村の「大陸半島志向」ともマッチして、池田によってもたらされた油蔚航路計画は壮大に膨らんでいきます。油谷湾の浚渫や湾内での埠頭整備、山陽側への鉄道連絡の強化なども計画されました。こうした盛り上がり背後には、関門鉄道隧道開通にともなう大陸への兵站拠点としての地域力を福岡に奪われるのを阻止したかった山口県の思惑も見え隠れしま



「油谷湾望楼台事務日誌」

県史編纂所史料は、「王政復古七十周年記念」事業として企画され、昭和12年から昭和19年にかけてに活動した山口県史編纂所の文書記録です。

「日本海海戦当時之油谷湾」（県史編纂所史料291）はすべて「写」ですが、「日本海海戦当時之油谷湾」「日本海海戦不可忘 露誠館」「明治37年以降明治38年度迄油谷湾望楼台事務日誌 大浦軍艦船艇事務所主任今津萬之助」「明治37、8年戦役 日本海海戦関係書類 其壹 須佐町役場」「日露戦役 軍事関係書類 須佐町役場」が綴じこまれていて、日本海海戦前後の沿岸町村の細かな動向を克明に読み取ることができます。

す。油谷湾開発期成同盟会の結成、蔚山の現地視察実施など、プランはかなり現実的なものとなっていきましたが、戦争の激化により頓挫します。

戦後、池田は油谷湾での塩田開発をすすめ、さらに富士山麓国際学園都市計画、メキシコ湾油田開発計画の立案にかかわるなど、最後まで地域振興プランナーとしての矜持を胸にその生涯を送りました。

写真2 油蔚航路の位置づけをものがたる概念図。「油谷湾一件」（戦前戦後土木部231）



【風雲急を告げる！ 最前線の海】

地理的に海辺の好適地にあるということは、同時に、戦時にあっては対外的に緊迫した状況にさらされてしまうということを意味します。油谷湾も例外ではありませんでした。

油谷湾湾口の沿海部には幕末期には4か所の台場（うち1か所が長門市指定史跡「泊台場跡」）が、山頂部の井上台には狼煙場が設けられていました。

迎えた明治38年（1905）の日本海海戦、油谷湾はいやおうなく緊迫ムードに包まれます。前年の、当時世界最強と謳われたロシアのバルチック艦隊発進の報は日本国内を震撼させました。この第一報を日本にもたらしたのが、単独でシベリア横断を成し遂げ、ベルリンで雑誌『東亜』の編集に携わっていた光井村出身の玉井喜作です。

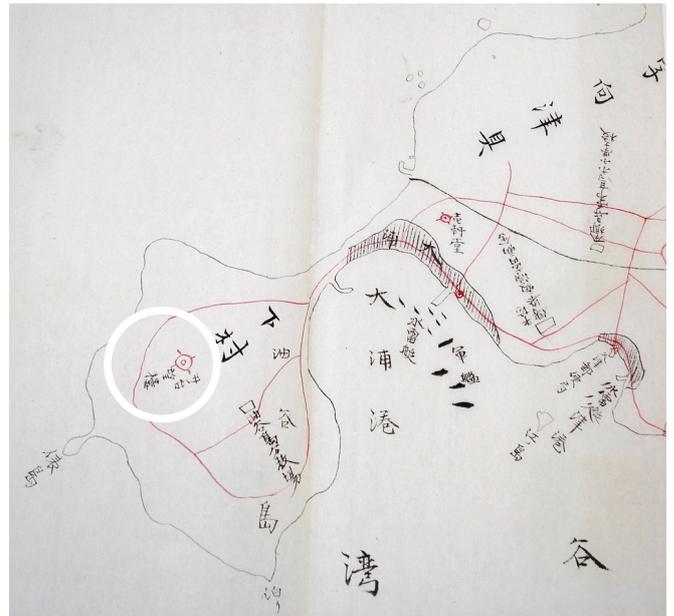
ロシア側の動向を監視するため、県内では、玖珂郡麻里布村・熊毛郡室津村・厚狭郡須恵村・豊浦郡豊西村・大津郡仙崎村青海島・阿武郡椿郷東分村笠山海岸の六か所に陸軍監視哨が、阿武郡見島村・豊浦郡角島村・同郡彦島村六連島の三か所に、海軍望楼が設置されました。そして、見張所の設置、避難計画の策定など、戦時に対応した体制づくりが求められました。

明治38年5月、沖合海上ロシア艦隊の動向監視のために、大浦区長今津萬之助により油谷湾口の高台に設けられたのが井ノ台望楼です（写真3白線内）。

海域の状況をつぶさに監視して、その様子を速やかに伝達するために望楼では手旗信号が定められていました（写真4）。

今津萬之助による望楼台事務日誌には「第8旗を掲ぐ」のような記述が残されており、このサインが実用されていたこ

写真3 油谷湾望楼附近。「明治37、38年事件功労者取調一件」（県庁戦前B79）



とがわかります。開戦当日の明治38年5月27日早朝、濃霧に覆われた角島沖で砲声を聞きつけた今津の指示によって、日本海海戦の第一電報「ツノシマヲキホヲセイキク」「カイセンラン」が海軍大臣宛・県知事宛に打電されました。この戦況第一報に対して、後日、今津は、海軍大臣・県知事から賞賛されることになります。

今津は、地元民を動員して、食料や水の補給にあたったほか、軍艦への慰問、戦傷者の手当、戦死者の葬儀や遺骨の国元送付など、まさに地域を挙げて海軍への後方支援に務めたのです。

後に今津は、地域のとりまとめ役として、大浦漁業組合長も務めます。戦時の功績を称えて、「露誠翁」「海軍のおぢさん」と呼ばれ、大正14年（1925）、大浦地区に露誠館という記念館ができました。『油谷湾小誌』（大正15年、菱海村刊行）には「裏日本唯一の海戦記念館」の触れ込みで、「名勝古蹟及城址」の項に俵島や竜宮の潮吹などの景勝地と併記されています。

「戦争・戦死者・慰霊」の考察と同様に、「戦い」を美化することなく、戦時の功績（救助・支援）を記録することの意味合いを意識しながら、こうしたストーリーを読み解くことが求められているように思います。

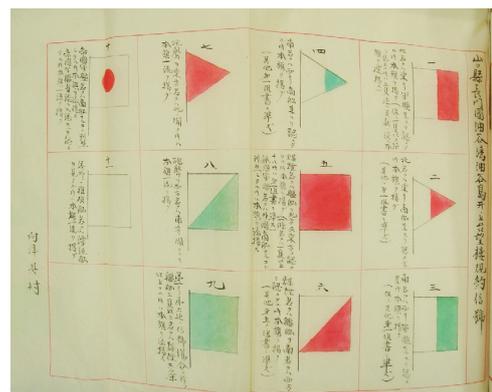
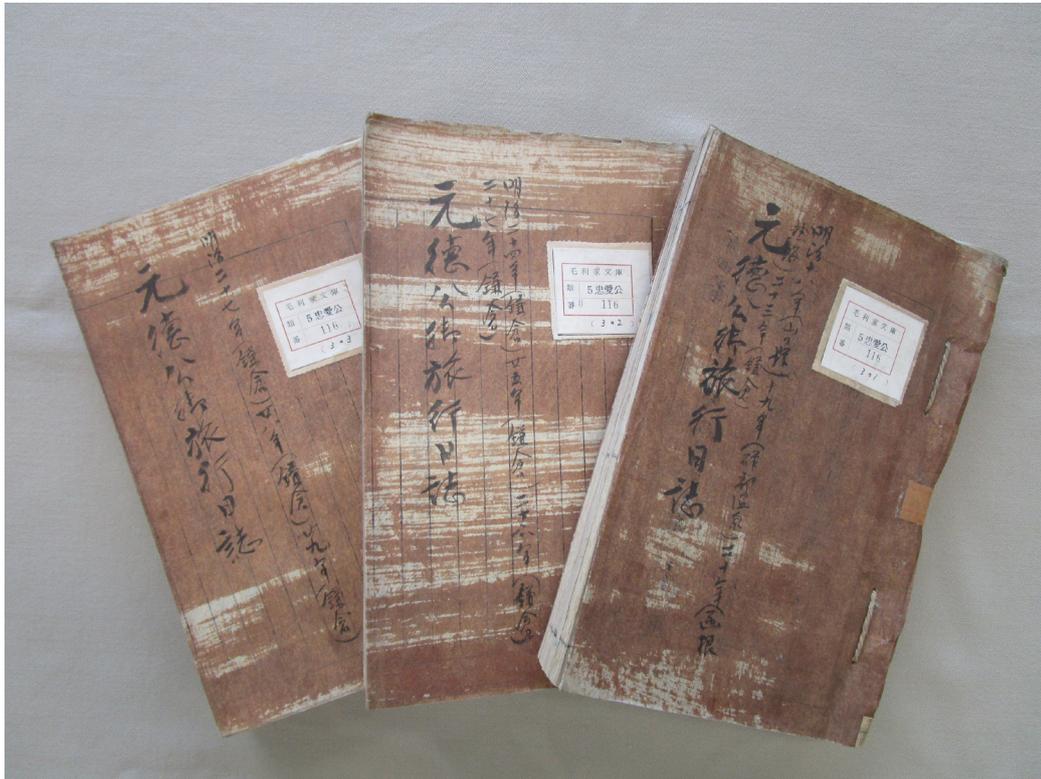


写真4 油谷湾望楼信号図解。「明治37、38年事件功労者取調一件」（県庁戦前B79）



「元徳公御旅行日誌」（毛利家文庫5忠愛公116）

防長 と海



その記録と記憶

21

戦いと友好⑩

近代華族と海（1）～明治期、公爵毛利家と海～

【明治の人々と海】

江戸時代の人々にとって、海岸部に住む人々を別にすれば、海は決して近い存在ではありませんでした。

海が比較的身近なものになったのは、幕末から明治初頭、外国人の来日が契機となったといわれています（畔柳昭『海水浴と日本人』中央公論社）。江戸（または東京）に滞在する外国人は、近郊のリゾート地として、温泉を箱根や那須に求めていた頃、湘南方面の海に注目していました。ただし彼らは、温泉や海で精神的な「癒し」を求めるだけではなく、医学的な療養地としても利用していました。海についていえば、海岸において新鮮な空気を吸うことや、「海水浴」による皮膚疾患の治療などです。もっともこの場合の「海水浴」は、「かいすいよく」だけではなく、海水に体を浸す（または海水を浴びる）「うみみずあび」とも言われていたそうです。

【公爵毛利家と海】

明治20年代になると、華族たちも海に向かう機会が増えてきました。特に鎌倉・湘

南方面は人気が高く、別荘を持つ者もありました。

旧萩藩主の公爵毛利家も例外ではなく、当館に残る記録では、明治23年（1890）から毛利元徳夫妻は鎌倉の材木座に逗留、海に出かけ始めます。特にこの年の10月、鎌倉の別荘を購入したこと（『山口県の近代和風建築』山口県教育委員会）は、訪問・滞在の頻度を増やすきっかけになったかもしれません。そのためでしょうか、来訪の季節は夏に限ったことではなく、時には鎌倉で年を越すこともありました。

滞在期間もまちまちですが、おおむね3～4ヶ月に及んでいます。その間、東京に一時帰京することもありました。帰京は最短で日帰りすることもありました。これは鉄道の延伸により、鎌倉・湘南地域が東京から日帰り圏内になったことを意味し、華族達の人気を集めた要因のひとつと考えられます。

【海での過ごし方】

公爵毛利家の人々、特に毛利元徳夫妻が明治20年代以降、海でどのように過ごしたかを見てみましょう。

「元徳公御旅行日誌」
（毛利家文庫5忠愛公116）

この資料は、明治18年（1885）から、元徳が没する明治29年までの間、彼が東京を離れ、出かけた地での活動を記した日記です。明治23年からは鎌倉別邸の日記となっています。

現在では旅行の都度ごとに作成された日記を数年ごとに合綴し、3分冊となっています。

なお、元徳没後も元徳夫人は鎌倉を訪問・滞在していることから、鎌倉別邸の日記は書き継がれました。毛利家文庫53女儀日記8「御後室様鎌倉別邸御滞在日誌」がそれに該当します。

東京では、元徳が品川へ釣りに出かけていたことが窺えますが、頻繁ではなかったようです。

ところが鎌倉での元徳は、しばしば釣りに出かけています。波戸場のみならず、沖へ船を出して釣りを楽しんでいました。アジ・キス・小鯛・カサゴ・ベラ・ヒラメ・ホウボウ・「金めはる」などを釣り上げると共に、アワビ・サザエ・ナマコなども捕って来ています（例えば明治28年〈1895〉3月4日、久しぶりに海釣りに出た元徳は「大ナルカサゴ一尾御獲もの有之、長サ一尺五寸位也」という釣果があったようで、「カサゴニ八珍しき由」との感想も日記に記されています）。時には昼食をはさんで午前と午後の二度にわたり、釣りに出かけることもありました。

ちなみに、船に乗って釣りをしていない元徳夫人は、地引網を曳く様子を見物することもありました。

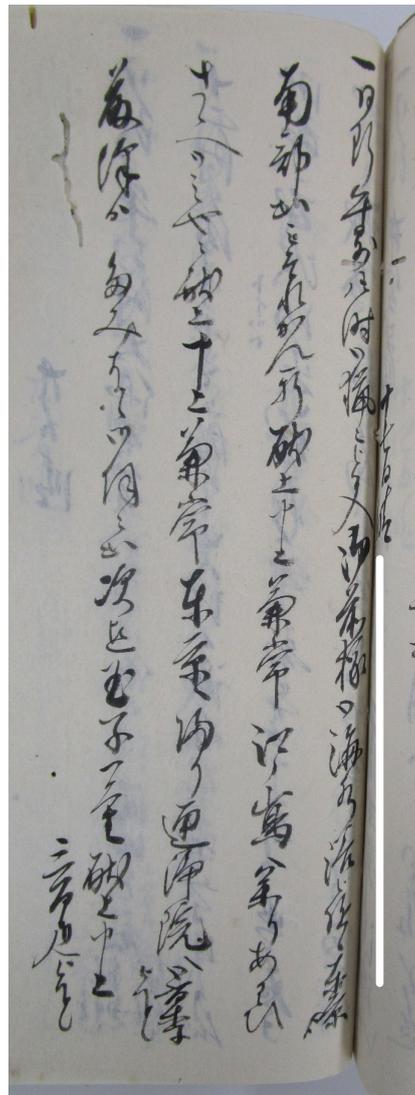
また、海辺への散策もよく行っていました。夫人を伴うことも多かったようです。これは単なる散歩ではなく、「御運動トシテ」行われていました。それ故、季節を問わず、散策に適した頃合いを見計らいながら、意識して出かけていたことが窺えます。なお元徳が、「海水中御緩歩」と、海水の中をゆっくりと歩いた記事もありました（明治23年〈1890〉7月14日条。右下写真）。

「海水浴」については、明治23年7月17日、元徳夫人が「海水浴」をした記事がありました（右上写真）。一方、若い世代にも「海水浴」は人気があったようです。例えば、同年の7月31日、鎌倉の元徳夫妻のもとを訪れた八郎（元徳の子で、西園寺家へ入嗣）は、「過日来」大磯で海水浴をしていました。また元徳没後の明治32年（1899）8月23日、万子（元徳の子で武者小路公共室）は、鎌倉の毛利邸から幼子を連れて「海水浴」を楽しんだようです。

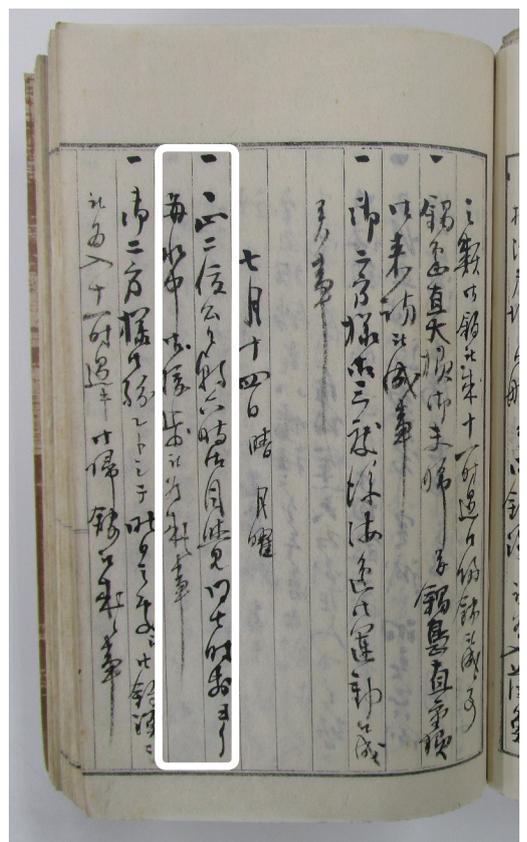
このように、華族の人々は次第に海との距離を縮め、頻繁に赴くようになりました。特に毛利元徳夫妻は、東京で生活する傍ら、鎌倉での生活を重視し、長期間、鎌倉に滞在しています。鎌倉では海釣りや海辺の散策などに時間を費やし、積極的に海に近づこうとしています。なぜ彼らは海を求めたのでしょうか。

明治23年（1890）5月、元徳は1ヶ月近くにわたり病床に伏せることがありました。体調の回復後、第十五銀行頭取の辞職など、社会的な要職から身を引く一方で、品川への釣りや鎌倉への訪問が増えています。この時の病気が呼吸器疾患を伴うものであったならば、元徳は個人的な趣味だけで海へ釣りや散策に出かけていたわけではなく、新鮮な海の空気を吸って健康を回復・維持することも目的のひとつにあったと推測されます。

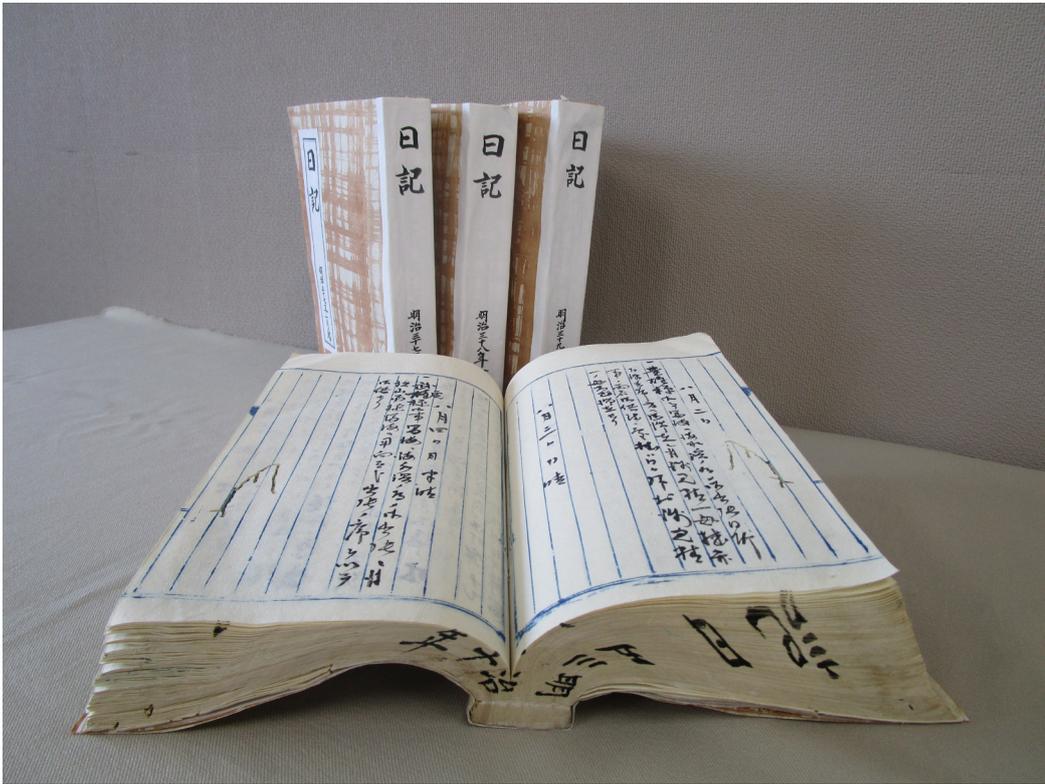
海が保養地として注目されはじめ、また元徳の病氣療養も重なり、公爵毛利家の人々は、海との繋がりを深めていったのでした。



（明治二十三年七月十七日）
…御前様御海水浴被遊候…



（明治二十三年七月十四日）
— 正三位公御朝六時御目覚、同七時前ヨリ
海水中御緩歩被為成候事、



「用達所日誌」（徳山毛利家文庫「用達所日誌」）

防長 と海



その記録と記憶

22

戦いと友好⑪

近代華族と海（2） ～明治期、子爵毛利家と海～

【徳山毛利家の明治】

明治維新後の徳山毛利家は、明治4年（1871）、元蕃（もとみつ）が隠居し、元功（もといさ）が家督を継ぎます。元功は長府毛利家の毛利元運の男子であり、夫人は元蕃の女・寿美でした。元功は明治33年（1900）に没し、元秀が後を継ぎました。夫人は元盛岡藩主・南部利恭（としゆき）の女で庸子（つねこ）。こういった人々が明治期の徳山毛利家を継承していきました。

ここでは元功と元秀、特に元秀の事例から、徳山毛利家と海との関わりを見ていくことにします。

【子爵毛利家と富海の海】

まず元功期について。彼の時期には海との関係を物語る記録はあまりありません。年齢的なことに加え、東京にいたこともその原因かもしれません。東京での生活の中で海との接点を探れば、明治22年（1889）、東京・築地にあった「海軍省前海」で開催された模型帆船の走行会に参加したこと（6月22日）、また明治29年、徳山に滞在中、櫛ヶ浜で網漁を見学した

記事（11月8日）がありました。

一方、元秀の時代になると、より海が近いものになったようです。特に彼は東京よりも徳山に滞在することが多かったことから、地元の海に関する情報が豊富です。

明治35年（1902）8月の記事によれば、元秀自身をはじめ、武虎・豊雄といった元秀の兄弟、また元功夫人といった人々が富海に「海水浴」に出かけたとのこと（裏面上写真）。このほか、8月30日には「富海へ御后室様外御弟妹様方御滞在中ノ費用其他整理」の必要があったとあるので、上記の人々のほか、元秀の妹たちも富海へ「海水浴」にでかけたことが想像され、夏の暑い最中、徳山毛利家の人々が、「海水浴」のために富海の海を求めていたことが窺えます。

彼らは富海まで汽車を使って移動していたようです。鉄道の開通と海水浴場の開設は密接に関わっていたことは、富海も例外ではありませんでした。

山陽鉄道の開通により、富海海水浴場は駅からも近く、またかつての宿場町も近隣にあったことから宿泊も可能で、賑わう条件



「用達所日誌」（徳山毛利家文庫「用達所日誌」）

徳山毛利家文庫は、藩政期徳山藩の記録が中心ですが、一方で、子爵毛利家の記録も多数残されています。

「用達所日誌」は、東京と徳山に置かれた用達所の日記であり、用達所の出来事は勿論ですが、毛利家当主やその家族の動向などを伝えてくれます。また、「用達所出納簿」と併用すれば、近代華族の活動を鮮やかに蘇らせてくれることでしょう。

が揃っていたといわれています（『防府市史 通史Ⅲ 近代・現代』）。加えて富海はかつての徳山毛利家の領地。毛利子爵家の人々にとっては、親しみやすい地でもあったことでしょう。

【徳山の海】

明治30年代、海は、これまでの「海水浴」とあわせて、体力の増進を目的とした水泳の場としても活用されてきました（これまでの「海水浴」の需要も依然高く、例えば明治37年（1904）、元功夫人が徳山近郊の「横浜」へ出かけています）。

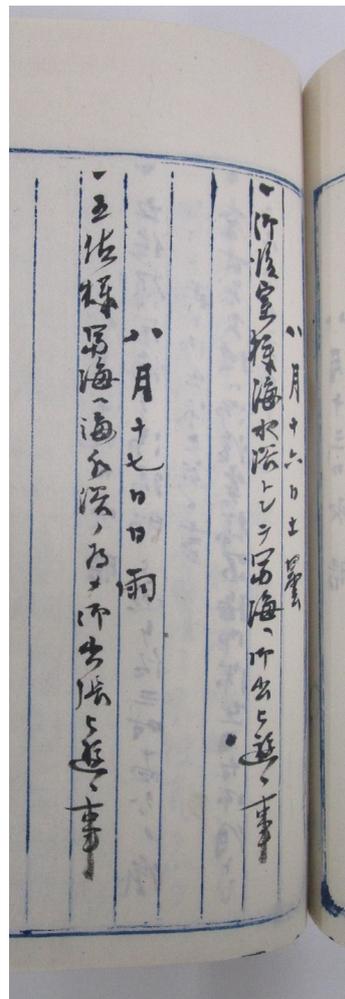
元秀の弟である豊雄は、明治37年の夏、徳山中学校において開かれた「水泳修業証書授与式」の席上、水泳講習を受けた証である「講習証書」を授与されました。証書によれば、この時の水泳講習は8月1日から20日間、徳山町の海浜で開かれ、「小堀流遊泳術」を学んだとあります。20日間にわたる水泳の練習は、厳しいものだったかもしれません。

なお、水泳については、同年、元秀の義弟にあたる南部利淳（元秀夫人庸子の弟）が徳山に來訪中、「那智水泳場」へ元秀と共に出かけたと記事もありました。利淳は当時20歳。27歳の元秀と共に、水泳を楽しんだことでしょう。

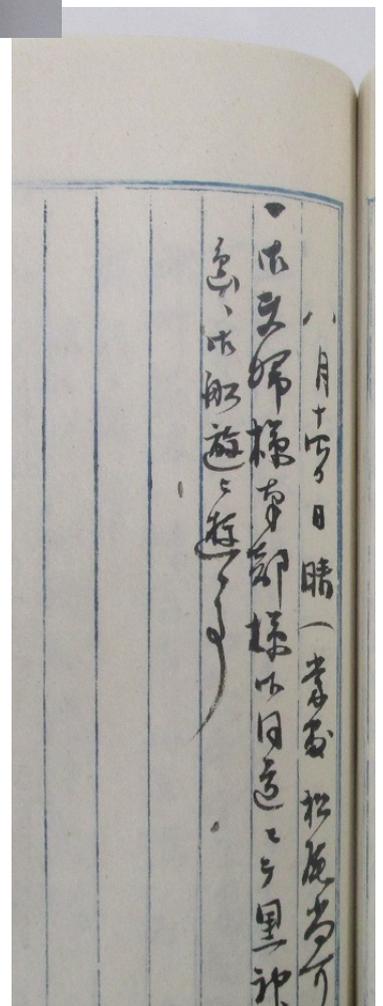
また子爵毛利家の人々は、海での船遊びに興じることもありました。行き先は黒神島、仙島周辺が選ばれています。元秀夫妻が元功夫人と共に、あるいは遊びに来ていた南部利淳や南部恭子（利淳の妹）を伴って徳山の海を楽しみました（右下写真）。また、元秀の弟妹である豊雄・政子・艶子の3人も、船遊びに出かけています。

さらに船遊びと釣りとをセットで楽しんだ記事も見られました。明治37年6月1日、元秀はキス釣りのため仙島方面へ出かけていますが、同時に船遊びもしたそうです。

このように、子爵毛利家の人々は、地元の海を、ある時は海水浴で、またある時は船遊びや釣りを満喫していたのです。



（明治三十五年）
 八月十六日 土 曇
 一、御後室様海水浴トシテ富海へ御出被遊候事、
 八月十七日 日 雨
 一、五位様富海へ海水浴ノ為メ御出張被遊候事、
 （徳山毛利家文庫「用達所日誌」53より）



（明治三十七年八月十四日）
 一、御夫婦様、南部様御同道ニテ黒神
 辺へ御船遊被遊候事、
 （徳山毛利家文庫「用達所日誌」54より）



写真1 「船法議」（佐川家文書（平生町佐合島）626-3）

防長 と海



その記録と記憶

23

港と船①

廻船式目 ～海の憲法～

廻船式目はほぼ全国の主要な港に分布し、江戸時代末期まで、多少の変化はあるとしても、ほぼそのまま海の憲法のような意味、また海上紛争解決法の性格を持つものでした。上の写真は、佐合島の庄屋・畔頭であり、九州諸藩の大名・幕府の役人・琉球使節・朝鮮通信使などの往来に際して船御用をつとめた佐川家に伝わった廻船式目です。

【廻船式目の成立】

従来廻船式目は、貞応2年（1223）というその奥書から「偽書」としての扱いを受け、歴史学からの十分な分析がなされてきたとはいえません。「廻船式目は当時の廻船業者の海上における慣習を集積したもので、室町中期あるいは戦国期に成立したものである」といったこと以上の言及は避けられるのが常でした。

廻船式目の「成立」は、これら海の慣習法による調停機能をもつ組織の成立を暗示していますし、また、ある時期ある場所で成立した一つの廻船式目が全国的に広がっていったこと、逆にいえば廻船式目を受け入れる体制が全国的に成立していった

ことを示しています。その全国的な展開は東廻り・西廻り航路の開発以後の時期に求められるでしょうが、原型としての廻船式目の成立の背後には、後に全国的に展開するような海運の発達がすでにみられた地域があったとみていいでしょう。その成立の時期は、何年何月何日といった特定できる性格のものではありません。

以上のことから、この廻船式目の成立した背景にあった社会的な状況について、中世後期・戦国期の瀬戸内海における問（問丸、廻船業者）のネットワークの成立段階、すなわち港＝問（問丸）が海の秩序の保証者となっていった段階を想定することは、あながち不自然なことではありません。

そしてその内容は、たとえば近世の萩藩等において、廻船式目がそのまま藩の法令として流用されていることを思えば、慣習法として広く認知された、根強いものであったと考えられます。

【「法」の主張】

廻船の契約規定や損害補償条項などを含むこの法は、全国で80以上のものが知られており、江戸時代には全国の主な



写真2 「船法度三拾壹條」（旧藩別置 11 豊浦藩旧記 64）

「豊浦藩日記」は明治になって編纂された豊浦藩（萩藩の支藩）の法制・民政・産業・宗教等に関する史料集です。

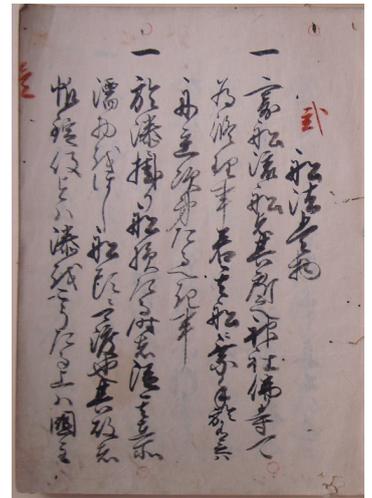
第64冊に廻船式目を載せています。（裏面表参照）

廻船・海運業者は皆この法を大切に秘蔵してきたといいます。あまり歴史学の研究対象にならなかったこの法も、実際の海の世界に深く根をはり、長い命脈を保っていたのです。

それにしても「理をま（曲）ぐる法八あれども、法をまぐる理有べからず」の文句（写真3白線部分）は強烈です。西洋には「悪法も法なり」と毒盃を傾けた哲学者がいましたが、人間の作った「法」が人間を支配してしまうというその不思議……。

また、法が「秘蔵」されることによって威力を保つというのは、現在とは逆の、「古法は新法に優越する」という原則に基づいていると思われ、現在なお用いられる「先例」の効力の源泉を考えるヒントにもなるでしょう。

海の世界は、はるかな普遍性をもって我々の前に横たわっています。法と同じく、船もまた人間が作り、関係する人間の運命を直接左右する存在でした。

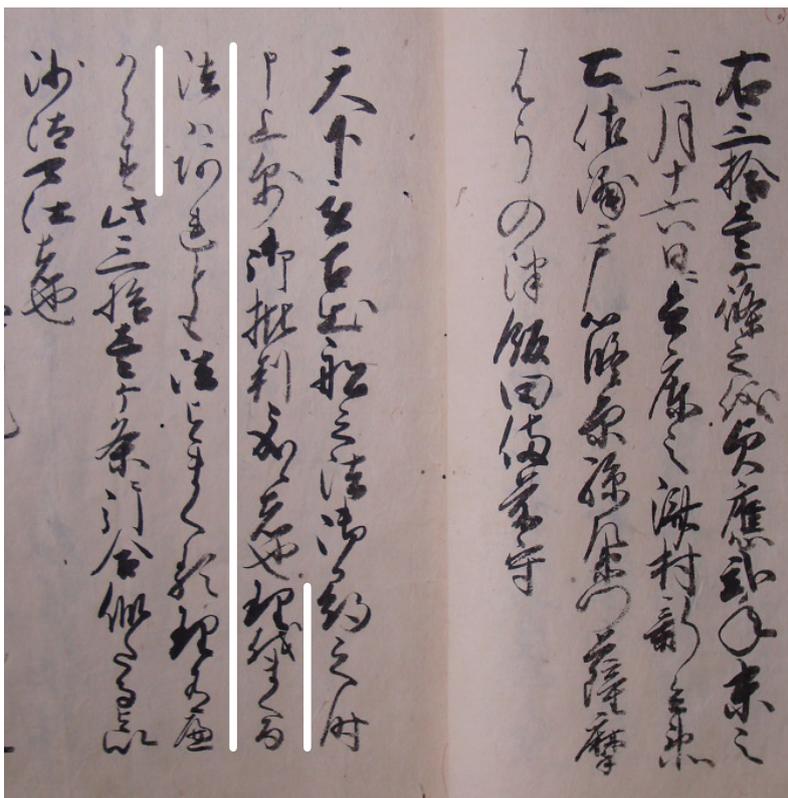


廻船式目は、そのほとんどがこのような「寄り船・流れ船」の取扱規定から始まっています。（「諸御書付二十八冊」）

【山口県文書館蔵の廻船式目】

	表題	請求番号	備考
1	「諸御書付二十八冊」	毛利家文庫 40 法令 135 (17)	萩藩の法令に取り入れられたもの（写真3）
2	「船法度三拾壹条」	旧藩別置 11 豊浦藩旧記 64	豊浦藩の法令に取り入れられたもの（写真2）。奥書に「元和五年（1619）二月日大坂長良屋 玉井主水殿」とあります。
3	「船法度全」	佐川家文書（平生町） 1084	奥書に「嘉永五年（1852）子ノ正月吉日 岩国神代村行光太十恵安宣書之」とあります。
4	「船法議」	佐川家文書（平生町） 626-3	（写真1）

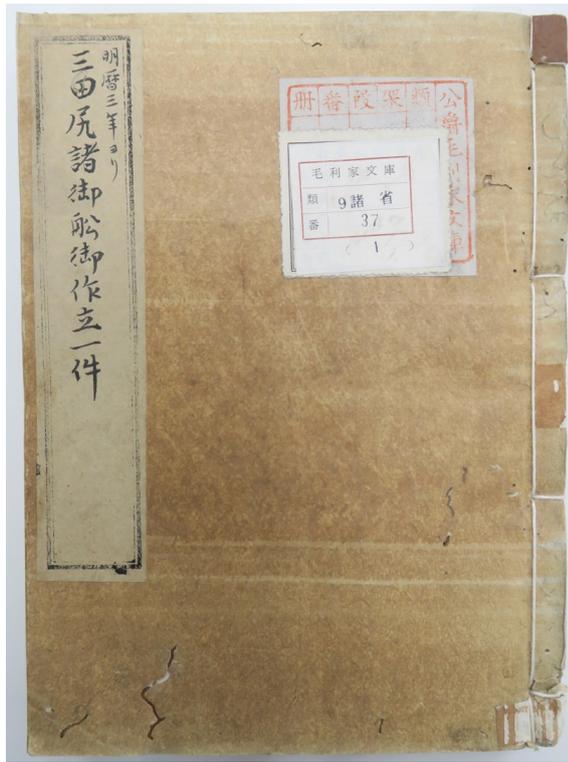
写真3（「諸御書付二十八冊」毛利家文庫 40 法令 135 (17)）



右三拾壹ヶ条之儀、貞応貳年未之三月十六日二、兵庫之濟（辻）村新兵衛・土佐浦戸篠原孫左衛門・薩摩はうの津（坊津）飯田備前守

天下被召出、船之法御尋之時申上、則御批判被成候者也、理をまくる法八あれとも法をまくる理有へ

からず、此三拾壹ヶ条二引合、似たるを以沙汰可仕者也



「三田尻諸御船御作立一件」（毛利家文庫9諸省37）

防長 と海



その記録と記憶

24

港と船②

御座船住吉丸の建造と船大工

上の写真は、万治元年（1658）に萩藩が御座船（藩主が乗り込む船）「住吉丸」等を建造した際の一件資料です。

住吉丸は前年（明暦3年）に起工され、この年11月に竣工しましたが、途中2月に三田尻の大火で御船倉にも大きな被害があり、関船（船手組の軍船）15隻などが焼けたようで、その関係資料も含まれています。これらの資料をもとに、この御座船の建造過程をみていきましょう。

万治元年というタイミングでの御座船の建造は、この年に萩藩2代藩主毛利綱広のお国入り（初入国）があったため、江戸への帰路に乗船する御座船の必要があったためと考えられます。

当時、藩の船大工は小林長太夫宣方という人でした。この人はかつて寛永年間（1624～43）に御座船春日丸の建造を藩から命じられた際、大坂に出張して幕府の御用船匠であった境九郎兵衛に後見を頼んでいます。その後も九郎兵衛の弟子となって大坂に逗留し、一国一人の秘伝を伝授されました。

したがって、萩藩の御座船は「境流」の

技術による建造です。

当時の大坂は豊臣秀吉の朝鮮出兵時に大型船を大量に建造したこともあり、その先進・中心地でした。なかでも境流は幕府御用として栄え、薩摩藩や土佐藩の船大工も、この境流の秘伝を受けています。

ところが、明暦3年（1657）に住吉丸建造を命じられたとき、またもや藩は境九郎兵衛を宣方の後見につけました。

すでに伝授を受けていた宣方はおもしろくなかったことでしょう。「趣有之」（おもむきこれあり）と記しています。九郎兵衛は息子の八郎右衛門と弟子一人を伴って三田尻に来ました。

さて、大型和船は、一般的に

- ① 鋸始め（ちょうなはじめ）
- ② 航居（かわらすえ）
- ③ 筒居（つつすえ）
- ④ 船おろし

などの儀式を経て完成します。秘伝が多く詳細は不明ですが、②③についてはこの資料に簡単な記述があります（解説シート25参照）。

旧萩藩御船倉
(国史跡。萩市浜崎)

この御船倉は、本文の「住吉丸」を格納するには小さすぎるようです。三田尻の御船倉の絵図（「三田尻御船倉指図」毛利家文庫58絵図972）には御座船格納施設が描かれていますから、萩藩の御座船は三田尻常駐だったと考えられます。

参勤交代に海路を使うときは、一行は萩から三田尻まで陸路をとり、そこから大坂近辺までが海路でした。大坂から伏見までは「川御座船」に乗り換えて淀川を上りました。長府藩の「川御座船」の図が当館毛利家文庫58絵図990にあります（裏面）。

また、徳山藩の御座船「大鵬丸」を描いた絵巻「御軍役御船建」が周南市美術博物館にあります。

さて、完成した住吉丸は二人がかりの大艘48丁立（96人漕ぎ）、橋船2艘は18丁立と16丁立、左右の関船「隼丸」は32丁立と42丁立という大きさでした。

大艘48丁立は、判明している熊本藩の御座船「波奈之（なみなし）丸」（大艘46丁立）とほぼ同等ですから、波奈之丸の全長30m弱、全幅約6.6mの大きさが参考になります。これは諸藩に許された船の最大規模（500石）

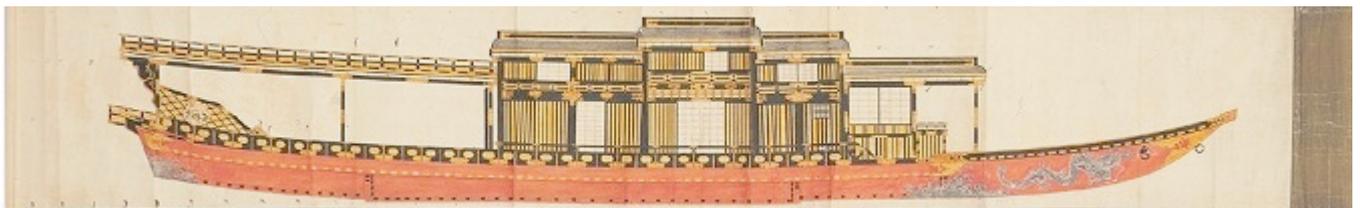
に近いものでした。

完成後、後見にあたった境九郎兵衛らには謝礼が、小林宣方らには褒美が与えられました。

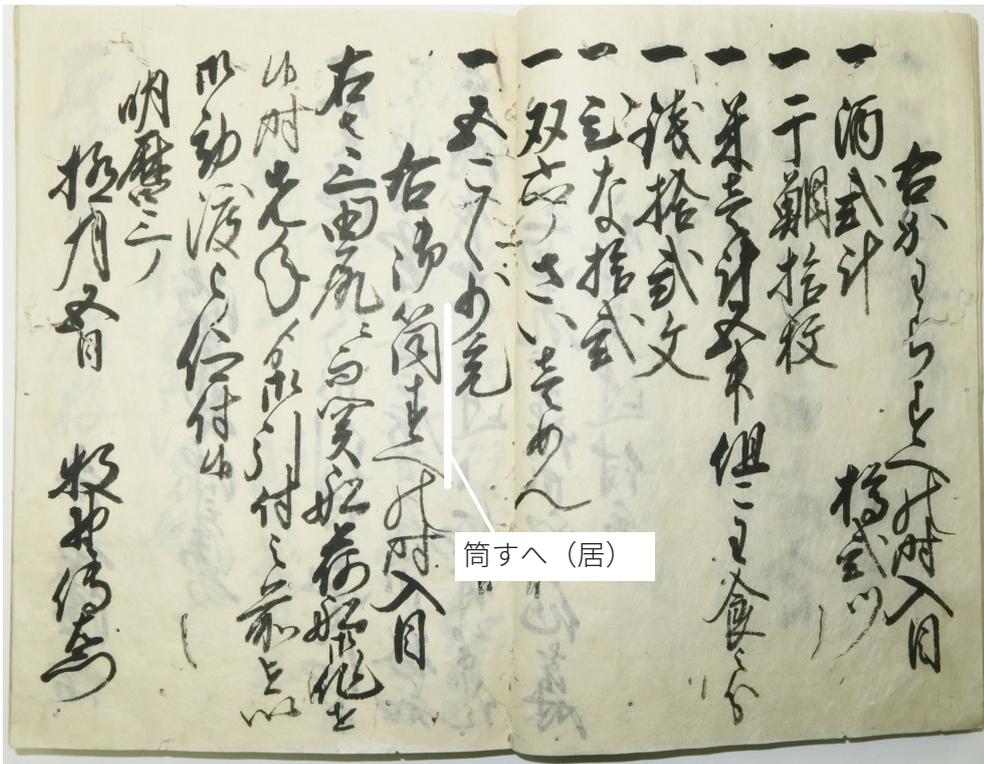
小林長太夫家の譜録をもとにした、宝暦2年までの萩藩の御座船に関する記述は表のとおりです。

【宝暦2年までの萩藩の御座船に関する記述】（毛利家文庫32譜録219 小林長太夫堯慶 中船頭（船大工棟梁）による）

年	船大工	事項	
慶長年中	小林長太夫久安	境丸（御座船）建造	
慶長14		1609	慶長14年、幕府は500石以上の安宅船を没収（商船は適用外）、以後諸大名は関船（軍船）を大型化・艤装して御座船とした
寛永5		1628	80丁立の御座船を建造したが様子あって解船（上の事情によるか？） 虎丸（御座船？）
寛永年中	小林長太夫宣方	春日丸（御座船）建造の際、大坂の境九郎兵衛（幕府の御用船匠）に後見を頼む	
正保2		1645	境九郎兵衛の弟子となり大坂逗留、一国一人の伝授を受ける
明暦3		1657	住吉丸（御座船）建造の際、九郎兵衛に後見を頼む
寛文12		1672	長盛丸（御座船）建造
			万春丸（御座船。長盛丸を改称、御祝替）
			大鵬丸（御座船。万春丸を改称、御祝替）
			御召通船4艘、諸御船建造 中船頭となる
貞享2	1685		
天和3	1683	養子。実は船大工尾崎十郎兵衛の子	
元禄1	1688	境八郎右衛門の弟子となる。御座船建造の際は自分（境）を召し寄せる必要はないと談じた	
元禄1	1688	鳳雛丸（御座船）建造	
		万祥丸（御座船。鳳雛丸を改称、御祝替）	
元禄13	1700	万寿丸（御座船）建造	
正徳5	1715	龍宝丸（御座船。万寿丸を改称。下回り担当。養子の方好と）	
享保1	1716	仁鳳丸（御座船）建造。養子方好と	
		御座船4艘、御召通4艘、御召替そのほか諸船建造	
		御座船新造の際は付け届けのため大坂へ登る	
		船材買得のため大坂・備前尻海・安芸倉橋・筑前若松に出向	
元禄12	1699	養子。実は作間太郎兵衛の子	
		船材買得のため大坂・備前尻海・安芸倉橋・筑前若松に出向	
正徳5	1715	龍宝丸（御座船。万寿丸を改称、下回り担当。父方忠と）	
享保1	1716	安昌丸（御召替）建造	
享保14	1729	跡目。幼少にて寛保2年まで14年間尾崎新五左衛門と兼帯	
元文4	1739	坤厚丸（御座船。見習いとして下回り担当。その際幼少にて、「御筒居」の節に、家筋に対し祭文の読誦を仰せつけられた）	
寛保3	1743	独立。この年から毎年1月11日に斧初めの儀式をつとめる	
宝暦2	1752	安定丸（御座船。坤厚丸を改称、御祝替）	



★当館の「御座船図」（毛利家文庫58絵図990）は、長府毛利家が大阪に常駐させていた「川御座船」の図です。諸大名は、大阪近辺で海の御座船を降りたあと、淀川をさかのぼるために「川御座船」を備えていました。（解説シート16「朝鮮通信使」参照）



「三田尻諸御船御作立一件」（毛利家文庫9諸省37）

防長と海



その記録と記憶

25

港と船③

船玉（船霊）

【船玉と船大工】

船玉（船霊）は船の守護神で、多くの場合、和船の帆柱の受材である筒（つつ）の下部に小穴をあけ、納物として糴・賽（サイコ）・五穀・銭などが封入されます。

この封入の儀礼は、萩藩の御座船（藩主が乗り込む船）建造の記録等では「筒居（つつすえ）」と記されており、造船儀礼中で最も重要な行事とされていました。

上の写真は、万治元年（1658）に萩藩が御座船を建造した際、以前に建造した関船の造船儀礼を参考にしたものです（解説シート24参照）。

これによると、関船の「筒居」の儀式は、「筒」の前に祭壇を設け、ひな（糴）12・双六のさい（賽）1めん・五穀・銭12枚等を供え、その後「筒」の下部に封じ込めるものだったようです。

その際、「船玉祭文」等が読み上げられます。その祭文は秘伝とされていましたが、萩藩と同じく境流を学んだ土佐藩の船大工が伝授された船玉祭文が知られています。

萩藩の船大工であった小林長太夫家の堯慶は、元文4年（1739）の御座船坤

厚丸建造のときはまだ幼少で、先代の父もすでに亡くしていましたが、見習いとして船の下回り等の作事を手伝い、筒居の儀式のときには船大工の家として船玉祭文の読誦を仰せつけられています（解説シート24参照）。

船玉として封入される呪具については、民俗調査等から漁船をはじめとする小型和船のものが多く報告されていますが、それらと比べて住吉丸のものは雛人形の数がとびぬけて多くなっています。

ところが、萩藩の船大工が御座船の建造にあたって用いた「境流」では、その秘伝である「船玉祭文」のなかに「筒立之御祝儀」として「糴十二女男」とありますから、境流の作法としては正しいこととなります。「さい1めん」というのは、あるいはさいころ2個一対を合わせた形のものを作ったのかもしれませんが。

「筒」に船玉をこめるという作法は、航海神として名高い住吉神社の祭神「筒男（ツツノオ）」を思い起こさせますが、船玉祭文には数多くの神仏が読み込まれており、安全祈願のオンパレードの様相を呈しています。



「船玉命海上開運刷札」
（原田家文書（防府市）1002）

修験者が船玉の祭祀に関わった例は多く知られており、この刷札もその一例かもしれません。

海上において船の位置を知るには山の重なり具合を見る「山見」という一種の三角測量法が行われていましたが、その目当てとなる高い山上の祭祀には、多くの場合修験者が関与していました。

【船玉と修験者】

さて、当館には、以上のものとは系統を異にすると思われる船玉祭文の断簡が残されています（写真右）。

この資料は年欠のうえ前欠・後欠ですが、船の始源から説き始めて、船玉の根源を熊野の十二社船玉大明神とし、船の各部分や船具を、さまざまな神仏になぞらえています。そして、「帆柱の根本に祭る船玉」は、「骰子（サイコロ）二タ粒・雛一对・尺長髪七[拾]・寛永通宝拾式銅を祠こめ」とし、納めるサイコロの向きを説いています。

この資料は、徳地町（現山口市）の修験の霊場、山口県において「東の狗留孫山」と呼ばれた金徳寺あたりの修験者にかかわる可能性があります。

同様に修験者が船玉に関わった例として、九州英彦山の修験が船玉の神札を配布していたことが知られており、確証はありませんが、前頁写真の「船玉命海上開運刷札」は、あるいはその種のものの一例かもしれません。民間の船（商船や漁船など）の船玉の祭祀には、このような民間の宗教者の関与もあったと思われます。

【丙辰丸と船玉】

ペリー来航後に大船建造の禁が解除されたこと等から、長州藩は安政3年（1856）に洋式帆船を建造しました。2本マストの軍艦「スクーネル船」（「丙辰丸」）と1本マストの「バッテリー船」です（解説シート26参照）。

興味深いことに、これらの洋船にも、和船の伝統に従って船玉が祀り込まれました（「丙辰丸製造沙汰控」毛利家文庫15文武99）。その内容は、

スクーネル船：錢24銅・賽2対ほか（雛なし）

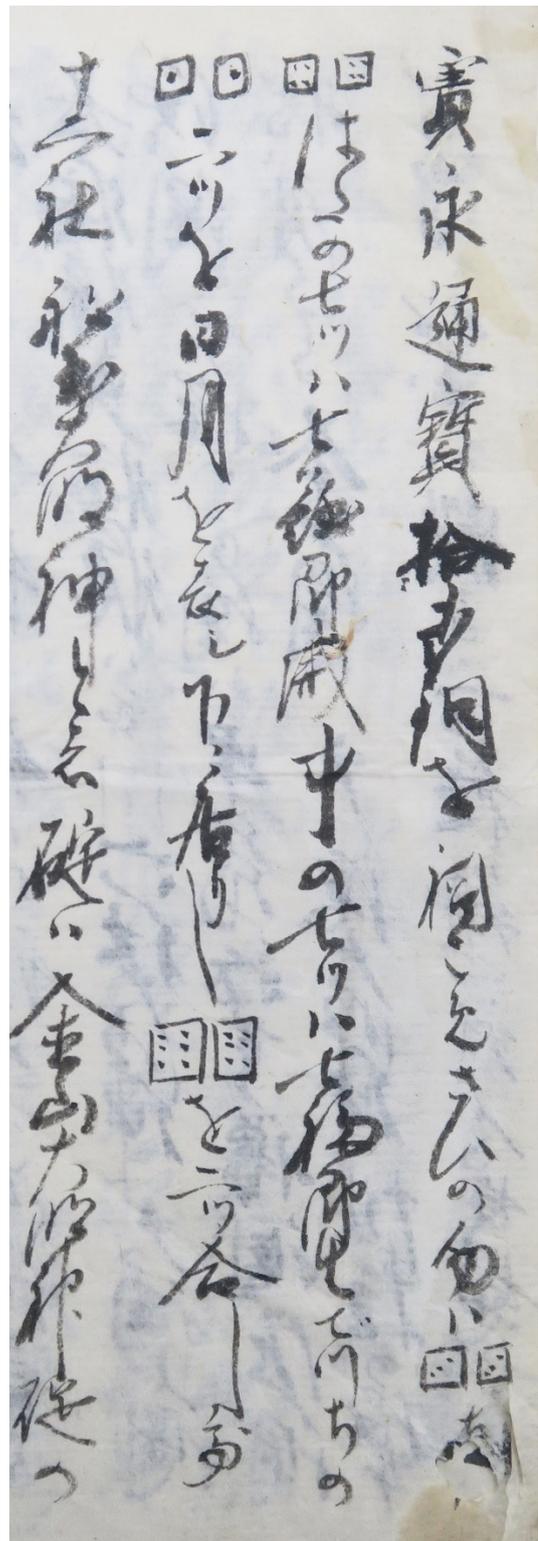
バッテリー船：錢12銅・賽1対ほか（雛なし）

となっており、前者が後者の倍になっていることが注目されます。

これが、マスト（帆柱）の本数と関係するのであれば、この船の建造に当たった船大工は、船玉を「帆柱の神」と捉えていたのかもしれません。



役割を終えた漁船のものと思われる船玉
（平郡東 海童神社）



写真③ 「船守護神覚書」（山田家（徳地町）41）（サイコロの置き方を記した部分）

寛永通宝拾式銅を祠こめ、さいの向八[]
 []、はたの七ツは七難即滅、中の七ツは七福即生、でっちの
 []ニツを日月を表シ、下二居り[]をニツ合して
 十二社船玉大明神と言、碇八金山大明神、碇の…

このサイコロ二つは、いわゆる「天（上）一、地（下）六、オモテ（前方）見（三）合わせ、トモ（後方）仕（四）合わせ」の置き方で、「はた」＝舷つまり外側の二と五を足して七（七難即滅）、内側の二と五を足して七（七福即生）としています。荷船によくみられる「中に荷（二）を積む」置き方ではありません。

資料中の「でっち」は一のぞろ目のことをいいます。



2つの丙辰丸の図（上）「丙辰丸製造沙汰控」（毛利家文庫15文武99）収録の図A
（下）「大艦製造一件」（毛利家文庫15文武100）収録の図B

防長 と海



その記録と記憶

26

港と船④

長州藩洋式軍艦の図 ～丙辰丸と庚申丸～

【幕末、大艦建造の解禁】

嘉永6年（1853）6月、ペリー率いる米艦隊が浦賀沖に来航し、幕府に開国を迫ります。米艦隊の強大さを実感し、海軍力強化の必要性を痛感した幕府は、同年9月、長い間禁止していた大艦製造を解禁し、諸藩に軍艦製造を促しました。長州藩も、他藩より遅れて安政3年（1856）から洋式軍艦建造に取り組みます。

【2つの丙辰丸の図】

丙辰丸（へいしんまる）は、長州藩が初めて建造した洋式帆船です。全長約25m（総長8丈1尺）、幅約6m（幅2丈1寸5歩）、排水量47トン、2本の帆柱をもつ帆船でした。安政3年5月～同4年2月、萩市小畑の恵比須ヶ鼻造船所（国史跡）で建造されました。丙辰丸の図としてよく紹介されるのが、「丙辰丸製造沙汰控」に添付された図A（87×104cm）です。操舵輪（ハンドル）なども描かれた詳細な図で、帆や旗が動くようになっています。一方、図Bは、「大艦製造一件」に綴じ込まれた丙辰丸の図です（32×44cm）。図Aほど詳細ではありませんが、①右舷側の

艦（船尾）に日の丸と毛利家の紋（一文字三つ星）のある幟と提灯が描かれている、②帆柱に掲げた日の丸と御紋の旗（吹き流し）の位置が図Aと反対、などの違いがあります。艦の幟や提灯は船籍を示す重要な道具です。本来図Aにもこれらを描いた貼紙があったのですが、現在では剥がれ落ちたり、誤った場所に貼り付けられています。図Bはその正確な位置を伝えるものです。また、帆柱上の旗の位置も図Bが正しく、図Aの右（「帆桁之端」）にある御紋の旗は最終的には採用されなかったようです。図Aは丙辰丸完成以前（安政3年8～10月頃）のもので、完成時の旗・幟・提灯の位置は図Bが正確なようです。

【改造後の丙辰丸の図】

安政6年（1859）1月、幕府は諸藩に対し、軍艦の帆には「白布」を用いること、および日の丸を艦綱に掲げることを命じました。当時の丙辰丸は、帆は「白地紺染堅筋罽替（のがわり）帆駿」と呼ばれるデザイン（図A B）を用い、日の丸は前方の帆柱に掲げていました（図B）。長州藩は幕命に従い、帆を「白布」に、日の



▼「丙辰丸製造沙汰控」（写真） （毛利家文庫 15 文武 99）

丙辰丸建造に関する唯一のまとまった記録です。『山口県史料編』幕末維新7に抄録。

▼「大艦製造一件」 （毛利家文庫 15 文武 100）

庚申丸建造に関する一件記録です。丙辰丸の改造に関する記事も含まれています。

▼丙辰丸・庚申丸製造に関する参考文献には、小川亜弥子『幕末期長州藩洋学史の研究』、道迫真吾『萩の近代化産業遺産』があります。

丸位置を艦綱へと変更するとともに、もと日の丸があった場所に「赤色之剣形旗」を掲げることになりました。同時に「片帆ヲ直帆ニ仕替」（前方の帆を縦帆から横帆へと改造）、「舷吉尺通り継足し」などの改造も計画しました。運用上不都合が生じてきたため（「運用方不便利有之」）です。同年12月幕府に届け出たところ、「赤色之剣形旗」を掲げる点以外は許可されました。「大艦製造一件」に綴じ込まれている「スクーネル形船之新図仕直之図」と注記された図が丙辰丸の改造図です（ただし「赤色之剣形旗」のある姿）。

【庚申丸の図】

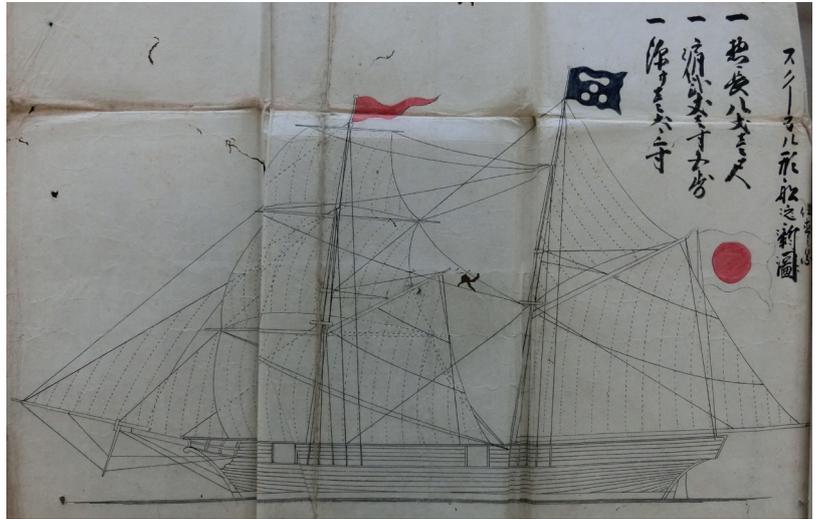
長州藩は安政5年（1858）7月、2隻目の洋式帆船の製造を計画します。船大工を長崎に派遣しオランダ人から新艦の設計を学ばせるとともに、閉鎖されていた恵比須ヶ鼻造船所を再開し建造を開始しました。万延元年（1860）5月に進水式が行われ、「庚申丸（こうしんまる）」と命名されました。長さ約43mもの大艦でした。庚申丸の製造に関わる記録「大艦製造一件」に綴られた「大艦之図」が、庚申丸を描いたものと考えられています。同記録には庚申丸の竜骨の図や内部構造を記した図も綴られています。

なお、毛利家文庫・58絵図987「軍艦之図」にも庚申丸の図があります。

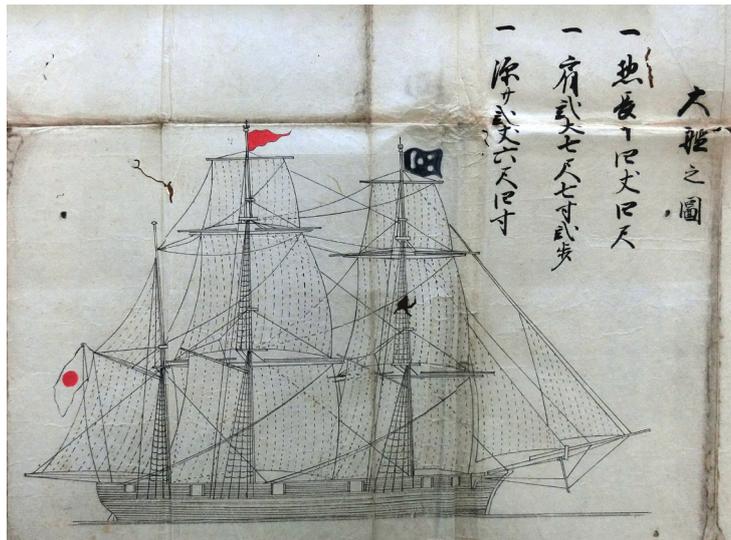
《丙辰丸・庚申丸（すべて「大艦製造一件」より）》



図B 丙辰丸の艦部分の幟・桃燈

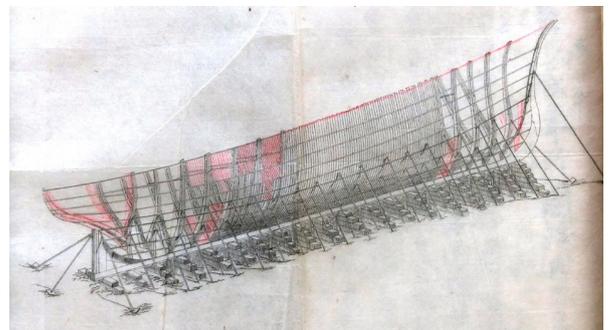


改造後の丙辰丸の図



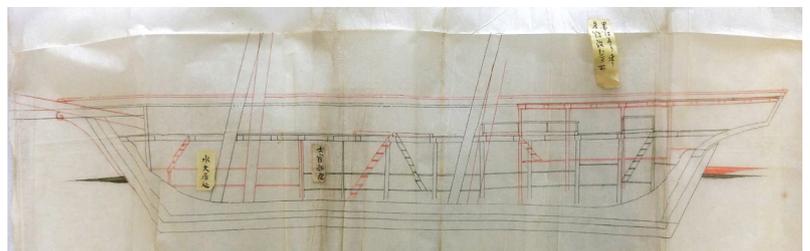
庚申丸の図

庚申丸竜骨の図



*丙辰丸同様、帆柱上の「赤色之剣形旗」は採用されなかったと推測されます。

庚申丸の内部構造の図





「下関港修築計画平面図」（「下関港修築計画概要」昭和13年5月刊行〈一般郷土史料B41〉）



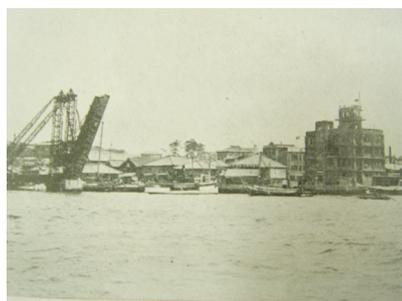
港と船⑤

近代防長の海辺 その視覚的体験（1）

～写された海辺～

明治以降、巨費を投下して、関門海峡の航路整備、下関港と下関漁港の整備、関門連絡（架橋構想、隧道掘削〈鉄道・車道・人道〉）など、さまざまな国家的プロジェクトがすすめられました。

上の写真は、下関港修築工事計画平面図。九州をも管轄した西日本土木事業の司令塔「内務省下関土木出張所」により作成されたものです。浚渫、埋立（関門隧道開通に備えた鉄道用地造成）、岸壁や護岸などの港湾設備が整備され、人工的な海岸線が形成されていった様子を観察できます。「下関要塞司令部検査済」の印は要塞都市としての下関の一面を物語ります。



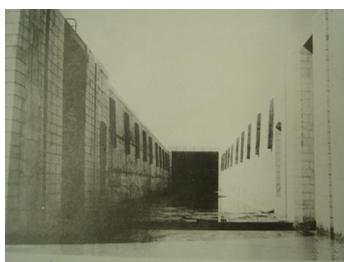
●写真1「刎ね上がる橋」（下関港拡張委員会『大下関港』昭和9年発行〈石川卓美文庫35〉）



写真2「海を渡る鉄道車両」（絵はがき「下関名所」貨車航走船）（田村哲夫収集史料946）

トンネルや橋で鉄路がつながる前、関門・宇高・青函連絡では「車両航送」（貨車や客車をそのまま船舶に搭載して輸送）が行われていました。国内最初の貨車航走は、鉄道院から依頼を受けた下関の宮本組（宮本高次）によって、明治44年（1911）に営業が始められました（関門トンネル開通により昭和17年（1942）廃止）。下関と対岸の小森江を結んだことから関森航路と呼ばれていました。

写真3「下関漁港開門」（山口県の水産『昭和12年発行（御蘭生翁甫文庫136）』）



『防長名蹟』
〈文書館図書 291-8〉
写真師麻生亮（雲烟）撮影

明治から大正、そして昭和へ。西洋技術の象徴として写真が広まっていきます。印刷技術の進歩とあまって、写真を組み合わせた記録は多様になっていきます。

写真が珍しいものであった明治期、行幸啓・博覧会・災害など、非日常を記録するものとして残されることになった数少ない写真のなかには、地域の「むかし」が写しこまれています。

やがて、写真による記録が数量的に増加していきます。建築・土木などの大規模プロジェクトの記録伝達的手段として写真が多用されるようになります。事業の詳細とあわせて、そこに多様な近代の「すがた」を確認することができます。

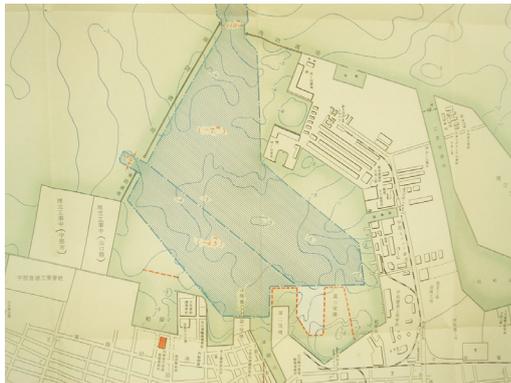
写真史料は、まさに近代の諸相の「うつしえ」なのです。

下関漁港閘門は、日本海側の下関漁港と瀬戸内海側の下関港の往来を確保するために昭和11年（1936）に築造されたもので、両港の水位差調整と潮流抑制の機能を果たしています。小規模ながらパナマ運河と同じ構造で、「未来に残したい漁業漁村歴史文化財産百選」（公益社団法人全国漁場協会）のひとつです（写真3）。

炭鉱の開発にともない昭和期に瀬戸内有数の産業都市に成長したのが宇部です。海底炭鉱の沖合への延伸と軌

を一にして宇部港が整備され、港を臨む埋立地に工場や煙突が林立し臨海工業地帯の景観が形成されました（写真4～6）。

渡辺祐策の「有限から無限へ」の理念が根底にはありました。宇部港と外海を仕切る二つの防波堤。それぞれの突端に設置された灯台は近代工業都市宇部のランドマークとも言えるものでした。



「宇部港修築計画平面図」
（内務省下関土木出張所「宇部港修築工事」昭和12年7月刊行〈一般郷土史料B52〉）



写真4 宇部港西側の工業地帯
（絵はがき「工業都宇部」宇部市役所発行、昭和12年以降〈文書館図書726-25-3〉）

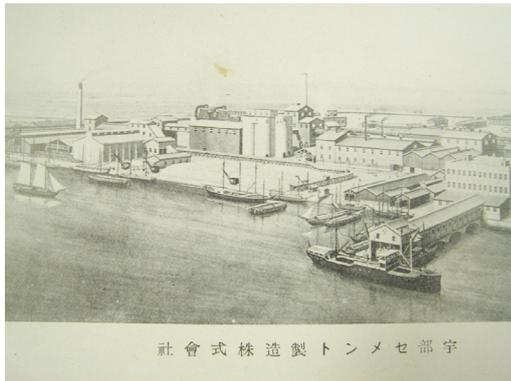


写真5 宇部セメント製造株式会社
『宇部（宇部案内）』（昭和4年〈一般郷土史料B47〉）
発行元の宇部市役所・宇部市商工会議所による宇部港整備後の未来予想のスケッチと思われる。



写真6 整備工事中の宇部漁港
〔昭和12年事業着手、昭和14年竣工〕
「宇部漁港修築工事誌」〈行政資料1930年代経済7〉
漁港整備は県営事業で行われ、事業内容は「修築工事誌」「竣工記念絵はがき」にまとめられています。



写真7 昭和初期の江崎港（昭和3年『田万崎村案内』〈一般郷土資料B283〉）昭和3年3月の山陰線飯浦・須佐間延伸開通を記念した冊子表紙。



写真8 明治末の小野田セメントと小野田港（『防長名蹟』より）

近代化のもたらすものは何であろうか。昭和初期と明治末期の海辺の風景、20年の隔たりがありますが、ともに近代の海辺のランドスケープです



写真1 昭和12年宇部市役所発行の書簡図絵「躍進の宇部」(文書館図書726-26)
裏には市街図が印刷され、さらには、金子常光による鳥瞰図が綴じこまれています。

防長 と海



その記録と記憶

28

港と船⑥

近代防長の海辺 その視覚的体験 (2)

～描かれた海辺～

写真同様、視覚的に「来し方」をなつかしむ手がかかりとしては、鳥瞰図に代表される描かれた資料があります。「わかりやすく」「興味深く」などの目的で作成されているため、「その向こうへ!」「伸びゆく」地域の未来像や、交通網整備によって身近に感じることができるようになった「遠く」への憧憬が描かれています。

【工業を描く】

近代の発展を象徴する海辺のランドスケープとしての臨海工業地帯には、多くの場合、「港」「船」「煙突」そして勢いよくたちのぼる「煙」が描かれています(写真

1・2・3)。今日的には、「環境汚染」という言葉が頭をよぎりますが、当時は、この煙の勢いや、波間を疾走する船の姿こそが、新しい時代へ人々を誘うものとして重要視されていたのです。



写真3 徳山旅館組合発行「徳山案内」(一般郷土史料B150)



写真2 「宇部興業案内」昭和14年発行(田村哲夫収集史料1252)
添付された平面図には、工場や火力発電所に取つかまされた宇部港と沖合海底に延伸した坑道が記録されている。

写真3は昭和9年(1934)の岩徳線全線開通を機に発行された観光案内と思われます。上部には多島海に帆掛船が浮かぶ穏やかな海の景色が、下部には工場の「煙突」と「煙」、そして「軍艦」が描かれており、海軍燃料廠を拠点とする軍港への変貌がわかります。



左「長府名勝案内」(金子常光画) 御菌生文庫 431

中「萩名所図会」(吉田初三郎画) 佐倉谷家 48

右「宇部鉄道沿線名勝案内」(金子常光画) 佐川家 1510
(いずれも大正14年制作)

パース・アイ・ビュー。空から地上を眺めたなら。「きれいに」「遠くまで」。富士山も、海の向こうの北海道も朝鮮半島も描かれています。目の前に繰り広げられる大胆なデフォルメと美しく着色された山紫水明の表現に目を奪われます。

大正から昭和にかけて、こうした鳥瞰図を製作したのが、「大正広重」と呼ばれた吉田初三郎(1884-1955)。事前に現地を舟念に踏査、さらに、クライアントの心のうちを入念に聞き込んだうえで初三郎の鳥瞰図は描き上げられていたと言います。ブームに乗って、たくさんの鳥瞰図絵師が登場。数多くの初三郎風の作品が残されています。

【水産業を描く】

写真4は、青海島への観光拠点としてだけでなく、水産業の拠点としても成長を遂げた仙崎近海の様子が示されています。海域ごとに代表的な魚の名前が記されています。青海島通村沖合には鯨も描かれています。

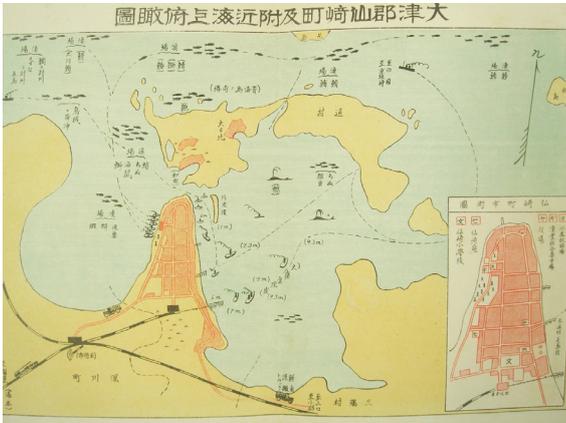


写真4 「大津郡仙崎町及附近海上俯瞰図」(一般郷土史料B183)

【観光を描く】

各地の鉄道会社にとって「多くの客を遠くに運ぶ」集客戦略は経営上重視されていました。鳥瞰図によるパノラマ的な沿線紹介もその一つですが、山陽電軌は海辺のレジャーランド「長府楽園地」を直営。長門鉄道も保勝会を組織して、植樹等、沿線の景観美化に加え、海辺の美観やレジャー（船遊び・潮干狩）を強調して利用客の心をくすぐったようです。



写真5 長門鉄道「西日本保勝会設立趣意書」(昭和11年)(一般郷土史料B183)



写真6 「雑件 庶務課」(県庁戦前A総務489)

【描かれた塩田の広がり】

写真6は「雑件 庶務課」(県庁戦前A総務489)に綴じ込まれた地図です。大正2年に西浦村から提出された電信事務開始請願に添付されたもので、工場地帯に転じる前の、中関塩田のにぎわいを物語っています。



写真7 彦島八幡宮境内図に見える海



写真8 大井八幡宮境内図に見える海

【描かれた神社】

写真7・8は、ともに「県社以下神社 学事兵事課 大正12年」(県庁戦前B652)に綴じ込まれた神社境内図です。郷社から県社への昇格申請に添付されたもので、近傍の海が穏やかに描かれています。彦島八幡宮の西隣には鈴木商店により製錬所が設置され、松枯れなどの煙害が問題になります。大井八幡宮の境内図に描かれた海辺は「阿武松原(大井松原)」と呼ばれた景勝地です。

【描かれた世界観】

「発展」「進歩」を最高のものとして追い求めた時代の痕跡。近未来的に描かれた船や勢いよく空にたちのぼる煙の向かう先はどこなのだろうか。きらびやかな鳥瞰図に描かれた桃源郷はどこにあるのか。

「写された近代」「描かれた近代」。「近代」に足を踏み入れておよそ150年。資料の波間を徘徊しながら近代を振り返ってみたものの、失なわれたものもあるのでは、そして、夢を追いかける旅に終わりがあろうか、心は揺れます。



西道白伯兼筆

(其二) 繪圖通開ルネント底海門關

昭和十一年六月十日
下關要司合部許可

防長と海



その記録と記憶

29

港と船⑦

「関門海峡トンネル絵はがき 関門海底トンネル開通図絵 其二」(文書館図書726-58-182)

海辺の風景と観光 ～絵葉書・観光パンフレット～

山口県は三方を海に開き、海岸線は全国6番目の長さです。県を囲むように連なる白砂青松や奇岩などは、観光資源として早くから注目されてきました。

明治以降、海岸線に沿うように日本海側には山陰線が、瀬戸内海側には山陽線の鉄道が敷かれました。鉄道敷設当初から海は観光資源として意識されていたようで、開通を記念して作られた各種の絵葉書には、海辺の風景が多く写されています。

また、観光客を呼び込むため、観光パンフレットも数多く作られました。それらは色彩豊かに印刷され、観光客を招くキャッチフレーズは今なお新鮮な響きで私たちを惹きつけます。

これらの風景には、現在では海岸整備や臨海工場の建設により、すでに記憶の中の風景となったものも少なからずあります。

ここでは鉄道の開通を記念して作成された絵葉書や、観光パンフレットに残る海岸の風景を見てみます。



【海士ヶ瀬海峡および角島】



【奈古湾および鹿島】



【竜宮大立神小立神】



【大井松原】



【阿川海水浴場】



【虹の松原・室積海水浴場】



【青海島奇勝】



【上関港】



【萩越ヶ浜向ヶ鼻】



「防長の観光」(昭和10年)
(一般郷土史料B 16)



「青海島案内」(昭和3年)
(一般郷土史料B 176)



【新興仙崎 奇勝青海島周遊】（昭和9年）仙崎および青海島を俯瞰した様子がポップアート風に描かれています。



【長門線豊北名勝図絵】（大正14年力）響灘から北浦海外を眺めています。海峡を挟んで九州や、はるか遠くに富士山も見えます。



【秋穂観光霊場案内】（昭和12年）秋穂八十八箇所霊場の鳥瞰図です。海の青さと、複雑に入り組んだ海岸線が美しく描かれています。



【徳山】（1960年代）



【富海避暑案内】（明治44年）



【観光の大島】（昭和30年代）



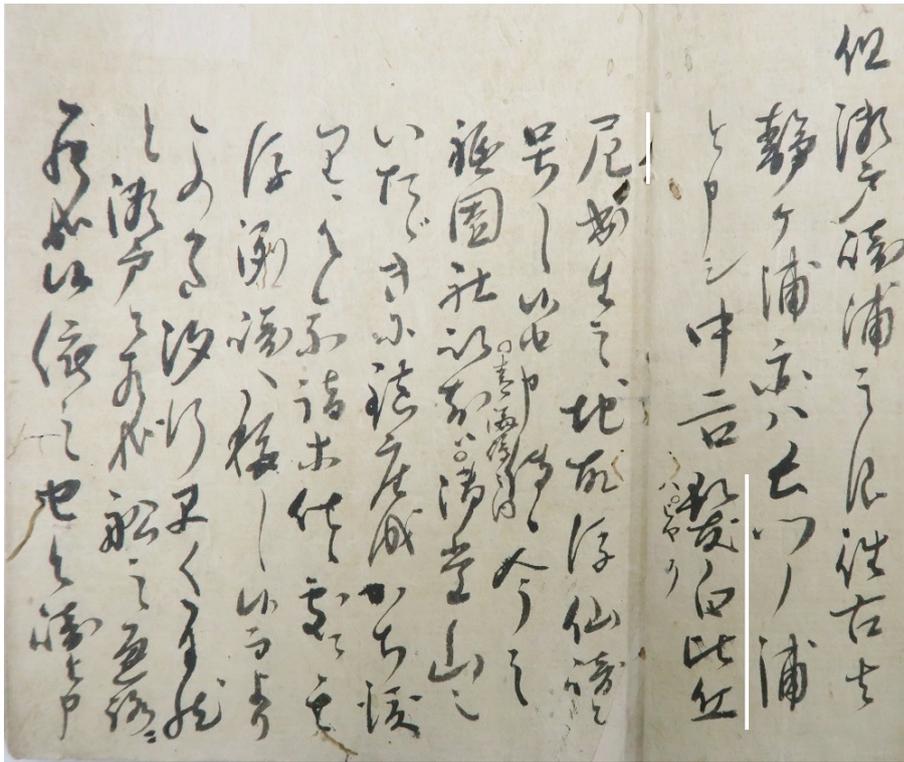
【室積町御案内】



【海の阿知須】



【名勝天然記念物
須佐湾案内】
（昭和3年）



「瀬戸崎浦覚書由来」（県庁旧藩記録「地下上申」755）

防長と海



その記録と記憶

30

港と船⑧

人魚の肉と不老長寿

若い姿のまま老いることなく800歳まで生存したという八百比丘尼（はっぴやくびくに、やおびくに）の話は全国に数多くあります。その多くは人魚の肉や九穴のアワビなどを食べたため老いることも死ぬこともなくなったとい、『ルパン三世』のアニメ化40周年記念作品として2011年に放送された「血の刻印～永遠のMermaid～」でご存知の方も多いでしょう。ここでは、当館に残る関連の資料を紹介します。

【仙崎 髪白比丘尼】

瀬戸崎（長門市仙崎）にのこる「髪白（はっぴやく）比丘尼（白比丘尼）」の話もその一つで、「ある翁が大きな亀（実は竜王の娘）を助けた礼に竜王に誘われ、海神の宮に招待され供応を受けた。そこで翁は偶然、2、3歳ばかりの嬰兒（実は人魚）が料理されているのを見た。その後、不老の薬としてその肉が出されるが、男は食わずに持ち帰った。その肉を食べてしまった翁の娘は不老長寿を得、最後は若狭にたどり着き、長者の嫁として栄華を極めて弘長元年（1261）に420歳で死んだ。800歳生きたのではなく、髪が白いので髪白（ハ

ツビヤク）比丘尼とよぶ」という筋です。

この話は仙崎の八坂神社に伝わる「秋津洲穴戸国仙崎津静浦記」（弘治3年＝1557）や「上利家文書」（長門市教育委員会蔵）に記されており、長寿だった仙女にちなんで仙崎と呼ぶようになったという地名伝承を伴います。

上の写真は、当館蔵「地下上申」（元文3年＝1738）の瀬戸崎の由緒の部分です。「瀬戸崎之儀、往古者（は）静ヶ浦亦八長門ノ浦と申シ、中古髪白比丘尼出生之地故、後仙崎と号し候」と簡略に記しています。

「地下上申」は当館から『防長地下上申』一～四として翻刻刊行されています。

【角島 瀬崎の尼宮】

下関市豊北町角島にあったという「尼宮」にまつわる伝承も、瀬戸崎の髪白比丘尼と同様、「人魚の肉」を食った女兒が不老となった話ですが、この女性は長寿の後、女船頭となって角島と本土の間にある瀬戸で水難死したということになっています。現在角島大橋が架かって多くの観光客を集め



「角島瀬崎の石壘」（裏面参照）

裏面の「寺社由来」で、角島の尼宮を「御社岩畔」としていることに注目すると、「畔」は防長においては「ぐる」と読み、神霊の宿る石壘のことですから、この尼宮はヤシロないしホコラではなく、瀬崎の海岸に今も残る石壘（写真上）そのものである可能性があります。

この石壘について角島での伝承は聞けないようですが、角島と同じく筑前鐘崎海女の移住の痕跡がある地には、いくつかの石壘遺跡が認められることから、不老長寿の伝承や石壘は、アマ（海女）の移動・移住という歴史的事象に関わる伝承・遺跡である可能性があります。

ているこの瀬戸は、古来海の難所として名高く、北前船もこの瀬戸を通らず、角島の北～西を迂回していたといえます。下の写真の記事を、そのような地理的な状況をふまえて読んでみましょう（当館蔵「寺社由来」2000「角島八幡宮外小社 徳蓮寺」）。元文4年（1739）に角島八幡宮神主岡村右近大夫から代官井上武兵衛に提出されたものです。

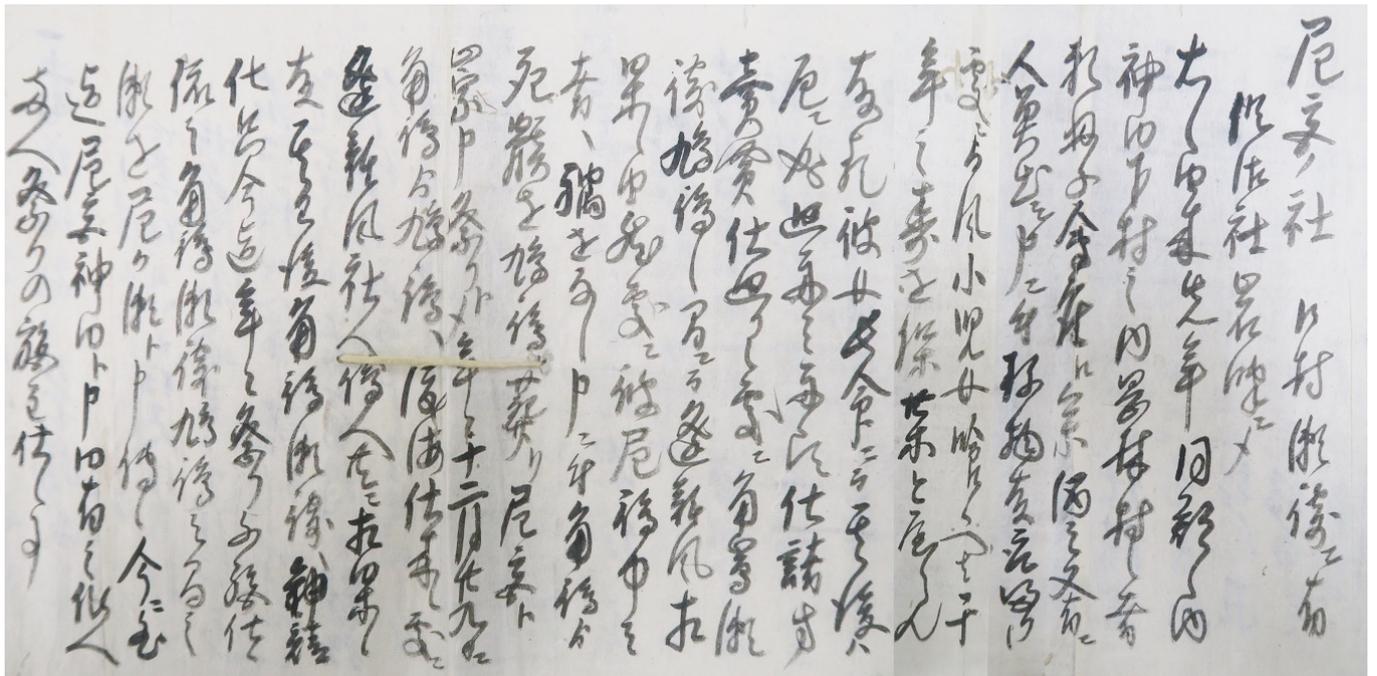
「寺社由来」も当館から『防長寺社由来』一～七として翻刻刊行されています。

【ほら貝を食べて不老になった女性】

当館蔵毛利家文庫29風説41「美々婦久路」に所収の「筑前国遠賀郡庄の浦仙女寿命貝のあらまし」は、福岡県北九州市若松区大字乙丸の貴船神社に伝わる、ほら貝を食って不老長寿を得た女性の物語です。「ある年

筑前芦屋浦の船が、奥州津軽の海岸に船がかりをして瀬戸物売り歩いていたが、ある時山奥へ迷い込んだ。洗濯していた女房が国はどこかと聞いて非常に懐かしがり、私の故郷も筑前だといって、泊めてもらって色々な話をしたが、実はこの女はもう600余歳であった。筑前にいた時分、病気になったが、子供たちが案じて珍しい貝を取って来て食わせてくれたら、すっかり回復したばかりか、衰え知らずになった。子や孫、ひ孫や玄孫にも先立たれたので、国を出て、全国を巡った末に津軽に来た。あの貝は自分の命の親なので、神職を頼んで舟留松の近くの祠に納めてある。筑前に帰ったら尋ねてみてくれ、と伝言した。この商人が筑前に戻りそこを訪ねると、伝次郎という者の家に、その貝（ほら貝）が伝わっていた」というあらすじで、今なお現地では、長生を願う「ほら貝祭り」がおこなわれています。

「角島 八幡宮外小社 徳蓮寺」（県庁旧藩記録「寺社由来」2000）



尼宮ノ社 同村（角島村）瀬崎ニ有
但 御社岩畔ニして

右之由来先年同郡之内

神田下村之内岡林村之者、

頼母子会座江参、酒之肴ニ

人魚出シ申二付、珍物故取歸り候

処ニ、与風（ふと）小兒女喰候へは千

年の寿を保薬とやらん

故歟、彼女長命ニ而其後ハ

尼二成、廻舟之舟頭仕、諸方

売買仕廻り候処ニ、角島瀬

崎嶋島之間ニ而逢難風相

果候由、然処ニ彼尼島中之

者へ禍をなし申二付、角島より

死骸を嶋島江葬り尼宮ト

崇申、祭りトして年々十二月廿九日ニ

角島より嶋島へ渡海仕来候処ニ、

逢難風、社人島人共ニ相果候

故、其已後角島瀬崎へ勧請

仕、只今迄年々祭り不絶仕候、

依之角島瀬崎嶋島之間之

瀬を尼か瀬ト申伝候、今ニ至

迄尼宮神田ト申田有之、作人
兩人祭りの施主仕候事